

福岡市

いる
入部 II

県営圃場整備事業に伴う第3次発掘調査の概要

(重留遺跡2次・岩本遺跡・四箇船石遺跡)

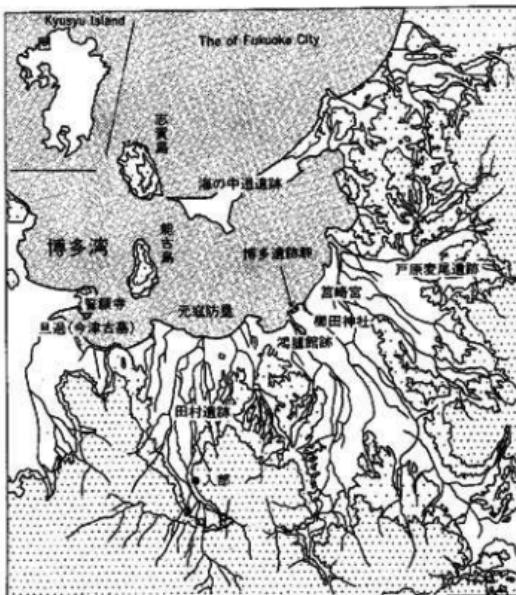
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第268集

1991

福岡市教育委員会

IRU BE
入 部 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第268集



遺跡番号 1RB-3

遺跡調査番号 8931

1991

福岡市教育委員会



第12地点 V 区 木棺墓SX02出土遺物 南から

序 文

福岡市の西南部に位置する早良平野は、近年の著しい開発と、福岡市街の発展に伴い、かっての肥沃な田園風景を失いつつあります。こうした開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査も急増し、貴重な遺跡の発見が相次いでいるところです。

本書で報告する重留遺跡第2次・岩木遺跡・四箇船石遺跡の発掘調査は、入部地区の県営圃場整備事業に伴うものです。この圃場整備事業は昭和62年度より八ヶ年計画で実施されており、その規模は約75haに及ぶもので、平成元年度は16haが計画されていました。

発掘調査は昭和62年度の第1次調査を皮切りとして実施し、第3次調査では縄文時代から中世に亘る遺跡や遺物を検出し、多大な成果をあげることができました。特に弥生時代前期の集落跡、古墳時代の集落跡又は鎌倉時代の屋敷跡の発見は、この地域の歴史や北部九州の古代史を知る有力な手掛りとなっております。

本書は、上記の成果についての概略を収録するもので、埋蔵文化財への理解と認識を深めるためにご活用いただければ幸いです。

最後に、調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに心から謝意を表する次第です。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は、福岡市早良区大字重留に所在する重留遺跡群の第2次調査、と大字東入部所在の岩本遺跡及び、大字四箇所在の船石遺跡の発掘調査に関する概報である。
2. 本調査は福岡県営入部地区開場整備事業に伴い、福岡市教育委員会が平成元年8月1日より平成2年3月26日まで発掘調査を実施した。
3. 本書の書名には事業名である「入部」を用いた。これは「福岡市文化財分布地図 西部Ⅰ」によれば、入部地区開場整備事業予定地内には多くの遺跡が所在しており、特定の遺跡名を書名に用いた場合の混乱を避けるための措置である。
4. 平成元年度の事業地には重留遺跡群・四箇船石遺跡群・岩本遺跡群が分布しており、重留遺跡群は第2次調査、四箇船石遺跡・岩本遺跡は各々第1次調査とした。
5. 本書で用いた遺構実測図は、井澤洋一、常松幹雄、野村俊之、池田祐司、田崎博之、吉武学、吉川扶希子、小川泰樹、西嶋彰子、福田小菊、多田映子、辻節子、土生喜代子、倉光京子が行った。
6. 本書で用いた遺構写真は気球写真を除いて、井澤洋一、野村俊之が撮影した。
7. 本書で用いた遺構実測図の整図は、吉田扶希子、井澤洋一が行った。
8. 本書の執筆・編集は井澤洋一が担当した。
9. 出土遺物・調査記録類は将来、整理報告が済み次第、福岡市埋蔵文化財センターに収藏する予定である。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 発掘調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の組織.....	4
第2章 遺跡の位置と歴史的環境.....	5
第3章 第3次調査の概要.....	11

挿図目次

Fig.1 入部地区圃場整備事業の年次計画図（縮尺1/12500）.....	3
Fig.2 重留遺跡群と早良平野の主な遺跡（縮尺1/75000）.....	6
Fig.3 周辺遺跡の分布図（福岡市文化財分布地図 西部Ⅰ）（縮尺1/16000）.....	9・10
Fig.4 第3次調査の試掘調査位置図（縮尺1/5000）.....	13
Fig.5 第3次調査の調査区位置図（縮尺1/5000）.....	14
Fig.6 圃場整備計画図（縮尺1/4000）.....	16
Fig.7 第1地点I～III区遺構配置図（縮尺1/500）.....	20
Fig.8 製鉄関連遺構SX03・05（縮尺1/50）.....	21
Fig.9 第2地点I～III区遺構配置図（縮尺1/400）.....	23
Fig.10 土壙墓SX02実測図（縮尺1/30）.....	25
Fig.11 第3地点I区第1・2面遺構配置図（縮尺1/400）.....	26
Fig.12 第3地点II～IV地点遺構配置図（縮尺1/500・1/300）.....	28
Fig.13 第3地点Ⅲ区第1面遺構配置図（縮尺1/400）.....	30
Fig.14 第3地点Ⅲ区第2・3面遺構配置図（縮尺1/300）.....	31
Fig.15 第4地点遺構配置図（縮尺1/500）.....	35
Fig.16 河川跡SD26土層図（縮尺1/40）.....	36
Fig.17 第5地点遺構配置図（縮尺1/400）.....	39
Fig.18 第6地点遺構配置図（縮尺1/300）.....	39
Fig.19 第7地点遺構配置図（縮尺1/300）.....	41
Fig.20 握立柱建物SB01（縮尺1/60）.....	41
Fig.21 第8地点I～IV区遺構配置図（縮尺1/400）.....	43
Fig.22 住居跡SC03実測図（縮尺1/80）.....	45

Fig.23	第9地点II区、第10地点I・II区、第11地点遺構配置図（縮尺1/400）	46
Fig.24	第10地点II区遺構配置図（縮尺1/400）	47
Fig.25	第11地点河川跡SD10十層図（縮尺1/60）	48
Fig.26	古墳時代住居跡SC01実測図（縮尺1/120）	50
Fig.27	弥生時代住居跡SC02実測図（縮尺1/120）	50
Fig.28	井戸SE01実測図（縮尺1/40）	51
Fig.29	第10地点III～V区遺構配置図（縮尺1/400）	53
Fig.30	溝SD01・02土層図（縮尺1/40・1/50）	55
Fig.31	第12地点III・IV区遺構配置図（縮尺1/400）	57
Fig.32	溝SD01・02・03上層図（縮尺1/50）	58
Fig.33	住居跡SC05実測図（縮尺1/100）	59
Fig.34	第12地点V・VI第1・2面遺構配置図（縮尺1/400）	62
Fig.35	土塙墓SX02実測図（縮尺1/30）	63
Fig.36	井戸SE01実測図（縮尺1/40）	63
Fig.37	前期斐棺墓ST03実測図（縮尺1/20）	64
Fig.38	第12地点VI区第3面遺構配置図（縮尺1/400）	66
Fig.39	斐棺墓ST01実測図（縮尺1/20）	68
Fig.40	第13地点遺構配置図（縮尺1/400）	68
Fig.41	第14地点遺構配置図（縮尺1/400）	72
Fig.42	第15地点遺構配置図（縮尺1/300）	75
Fig.43	第16・17地点第1面遺構配置図（縮尺1/400）	79
Fig.44	第16・17地点第2面遺構配置図（縮尺1/400）	80
Fig.45	第17地点遺構配置図（縮尺1/300）	84

表 目 次

Tab. 1	調査概要の一覧	2
Tab. 2	第3次調査地点一覧表	17
Tab. 3	第3次調査地点別遺構・遺物一覧表	18

付 図 目 次

付図 1	入部第3次調査(重畠遺跡2次・岩本遺跡・四箇船石遺跡)各調査区の遺構配置図 (縮尺1/2000)	
------	---	--

第1章 はじめに

(1) 発掘調査に至る経過

入部地区的圃場整備事業計画は当初、約100haの耕地を対象に提示されていた。昭和60年度のことである。当該地には、埋蔵文化財の分布調査等によって12ヵ所の遺跡群と古墳1基の存在が明確に把握されており、これをうけた埋蔵文化財課（当時文化課）では、農作物の休耕を待って、昭和61年3月17日から26日にかけて試掘調査を実施した。その際の試掘調査は、室見川以北の6ヶ所の遺跡群と古墳基の計9ヶ所を対象に行われた。試掘調査の結果、6ヶ所の調査地点において柱穴や溝を確認し、さらに拵塚古墳の周濠部では葺石等も確認することができた。表面での分布調査でも採集遺物などから、対象地域のはば全域に亘って、弥生時代や中世を主体とする遺構がかなりの密度で分布する可能性が強まった。

上地改良組合や農政側の計画によると、事業計画は昭和62年度から8ヶ年に及ぶもので、初年度5ha、次年度が10ha、以後5ヶ年が15haで、最終年度が10haというものであった。

昭和62年度の調査は、当初事業計画が定まらず、工事範囲の協議が整った昭和63年1月になつて着手することができた。そのため事前の試掘調査を行う猶予がなく、各構造物や田面の工事進行に沿つて遺構確認を行つた。このようにして検出した遺構が盛土等による保存のできない場合は、そのまま本調査に移行するという方法を探つた。

昭和63年度の事業計画は当初計画よりも規模が大きく16.2haの広範な地域に及んだ。このため、調査体制・調査期間・予算等の都合から対象地を最小限に絞り込む必要があった。試掘調査を5月～6月の間に実施し、その結果をもつて県・市の農政担当者と協議を行い、設計変更や施工方法の変更によって調査対象面積の縮小を図ることとした。

平成元年度は同様に昭和63年度の合意事項に基づき調査を実施した。但し、試掘調査に於いては、前年度と同じく、農作物が梅雨時期までに撤去されないため、約30%が試掘不可能になるという状況が今年度においても改善されず、川植え時期には既に調査対象地が湧水のため試掘不能となつた。その面積は全体の30%に相当する。又、本調査に関しては構造物等の基準杭が施工業者が決定し、工事が着工される9月まで設置されないことや、更に境界査定が不備であること、換地問題が解決していないこと、用水路等が設計変更によって追加、変更されるなど、年度当初に調査を円滑に進めるために農政側と行った協議事項が生かされておらず、文化財担当側が地元の改良組合と農政側に迫従するという結果を生んでいる。こうした問題が早期に解決されるよう農政側の協力を願いしたい。

協議事項

- ① 道路・水路等の半永久的な構造物は全て100%の本調査対象とする。
 - ② 切り土施工の田面については本調査の対象とするが、設計変更によって盛土施工が可能な場合は本調査の対象としない。
 - ③ 盛土施工の川面は原則的には本調査の対象としない。但し、耕作土の直下に遺構が存在し、併せて計画上の盛土の厚さが薄く、施工の際に遺構を傷める可能性が高い場合は本調査の対象として協議を行う。
 - ④ 切り土及び盛土施工を行わない川面、すなわち施工時に耕作土を除去しない田面については本調査は不要であるが、施工時に於いては整地作業のみにとどめる。
- ※ ③・④の施工方法については以下のとおり施工細則を決めている。
- A. 整地のみ（表土を吸わない場合）ブルドーザー・整地。
 - B. 盛土厚さ5~9cmの場合。バックホーにより埋戻し・荒整地。ブルドーザー整地。
 - C. 盛土厚さ20cm以上の場合。バックホー埋戻し・ブルドーザー整地。
 - D. 盛土厚さ30cm以上の場合。ブルドーザー埋戻し・整地。

但し、上記の協議事項について幾つかの問題を含んでいる。盛土施工方法に関して、必ずしも工事現場に於いて上記の点が順守されることは少ない。特に下請け業者が請負っている場合が多く、③・④においてバックホーの埋戻しを実施している状況は今日まで確認できていない。ブルドーザーによる盛土・整地が主体をなしているのが現状である。又、遺構面が耕作土の直下に検出できる場合も同様に耕作土の除去の際に破損を受けることが多々あるため、施工業者への協議事項の徹底を計ることが求められるが、本来、耕作土の下に遺跡が存在する場合は発掘調査の対象とすることが望ましいであろう。

Tab. I 調査概要の一覧

次数	年数	事業量	調査対象面積	調査面積	調査期間
1次	昭和62年	5.0ha	12,500m ²	15,000m ²	1988年1月6日~88年3月31日
2次	63年	15ha	15,000m ²	39,500m ²	1988年6月21日~89年4月17日
3次	平成元年	16.2ha	16,200m ²	37,500m ²	1989年8月1日~90年3月26日

次数	遺跡調査番号	遺跡略号	調査地地名	分布地図番号
1次	8748	SHE-1	早良区大字重留字石塚	重留84
2次	8801	SGT-1	早良区大字重留字塚木・字松本・字町田	重留84・85
3次	8931	SGT-2	早良区大字重留字松本・大字四箇字 船石・大字東入部字岩本・字熊本	重留84・85

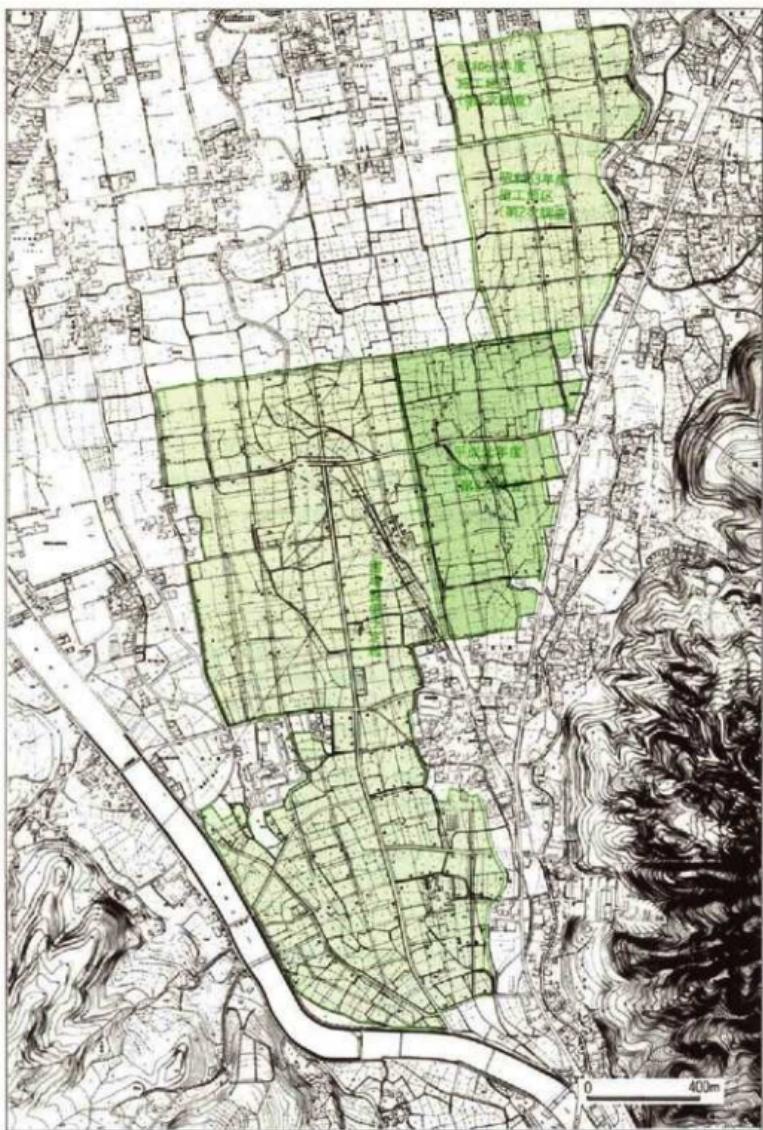


Fig. 1 入部地区圃場整備事業の年次計画図（縮尺1/12500）

(2) 発掘調査の組織

県営入部墳場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備鉱害課

福岡市経済農林水産局農業土木課

福岡市入部土地改良組合

調査主体

福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉

埋蔵文化財課 課長 柳田純孝

埋蔵文化財第2係長 柳沢一男

調査庶務 安部徹

調査担当 文化財主事 井澤洋一

埋蔵文化財第2係 常松幹雄、野村俊之、池田祐司

調査補助 田崎博之、吉田扶希子、高出一夫、小川泰樹

整理作業 吉田扶希子、西嶋彰子、福田小菊、倉光京子、多田映子

発掘調査協力

鴻臚館担当 主査 山崎純男

〃 〃 吉武学

山柴不動産、森部半助、猪子方代治、広瀬伴、横尾泰広、細川友喜、高田君敏、山口一郎、
田中宣親、神田宏太郎、尾崎達也、柳光雄、熊原範光、谷川幹彦、松田惣之助、金子啓佑、
野崎昭典、林幹雄、松尾透、山本智、中間輝幸、青川春美、木上智之、井上八郎、山路茂、
佐井一治、青柳寿子、青柳美智子、青柳律子、有馬千恵美、井上愛子、井上清子、井上ミ
子、井上ヒデ子、井上勝智子、井上ムツ子、出田澄子、因ヨシ子、川口シゲノ、清水シズエ、
倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、茶木和子、脚シミ子、坂本ハツ子、佐藤みずほ、高田
玉恵、谷吉美、多田映子、沈道子、宮崎栄子、永井鈴子、西嶋彰子、西嶋タツノ、西嶋洋子、
船出香代子、土生ヨシ子、旗ハナ子、平川富美子、平川史子、福田小舟、三谷朝子、堀尾久
美子、森山早苗、家近千代、柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山田トキエ、山田ヤス
子、結城千代子、横溝恵美子、吉岡光子、協坂チヤ、吉岡勝野、真名子シズエ、諸方寿々子、
諸方ミキ、吉岡直美、真名子キミコ、大鶴タカ、北崎明代、矢富富士子、西嶋ムラ子、島村
久美子、永井ユリ子、馬名木アサエ、結城タミ子、平川博子、綱口久子、松尾秋代、松尾典
澄、吉田扶希子、中村真由美、古川千賀子、尾崎八重、大内文惠、金子ヨシ子、菊地栄子、
正崎由須子、想慶とみ子、典略初、林孟子、平野ミサヲ、細川ミサヲ、平川上枝、清水邦子、
鶴田きみえ、真子アキノ、内田善美、内海光枝、田中昭子、綱口静子、平川マサエ、綱口末
子、和田裕美子、熊原年子、熊原トヨ子、海津宏子、三角チエ子、西口キミ子、姫タケ子、
小松由起子、綱田雅子、西タエ子、三好道子、鶴田喜美枝、結城タカ子、久保昌代子、坪根
孝子、藤長季子、堀ウメ子、中園登美子、正崎泰代

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

遺跡の位置する早良平野は西側を飯盛・長垂山山塊、東側を油山山塊、南側を背振山脈で区切られた、完結性のある小平野を為している。平野の中央には背振山脈に源を発する室見川が北流し、博多湾に注いでいる。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、その大部分は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成されている。第1次・2次調査が行われた地区は重留遺跡群にあたる。この遺跡群は早良平野の中央東寄りの室見川と金屑川にはさまれた沖積微高地上に展開する。標高は約25~28mで、現状は水田である。重留遺跡群は「福岡市文化財分布地図一西部I-」では南北1kmに亘る範囲が記されていて、行政的には福岡市早良区大字重留の中に位置する。第1次・2次調査は重留遺跡群の北端から中ほどにかけて行われた。第3次調査対象地内は重留遺跡群の両側を含む他、西南部に四箇船石遺跡、南側に岩本遺跡が分布している。行政的には大字東入部・四箇・重留に位置する。

ここで周辺の遺跡について見ていくと、室見川中流域には幾つもの沖積微高地が存在し、それらには遺跡が形成されている。四箇遺跡群は縄文時代~古墳時代に亘る遺構・遺物が検出されているが、特に縄文時代後期の三ヶ月形をした特殊泥炭層からは多数の上器、石器の他ヒョーダン、マメなどの栽培植物が検出されている。それより北側の田村遺物群は縄文時代後・晩期、弥生時代前期、平安~鎌倉時代を中心とした多数の遺構・遺物が検出されている。特に10地点調査では板付I式併行期の甕棺墓が検出されている。同期の甕棺墓は重留遺跡第2次調査でも検出しており、又、前期I~II式の集落が3ヶ所発見しており、この地域における弥生時代前期の集落の在り方や甕棺墓出現を考える上で貴重な資料と言える。室見川左岸の吉武遺跡群は旧石器時代から近世に亘る遺跡で、開拓整備や道路建設にかかる調査で莫大な遺構・遺物を検出している。特に「早良工墓」といわれている吉武高木遺跡や、墳丘墓を検出した吉武横渡遺跡などの弥生時代の墳墓には目を見張るものがある。また、古墳時代においても、帆立貝式前方後円墳の樋渡古墳や大型建物跡が検出されており、早良平野における拠点的集落の一つといえる。これに対応して、室見川の右岸では入部第2次調査において、坪塚古墳が長さ約75mを測る前方後円墳であることが判明した他、この古墳周囲には方形周溝墓群や集落が密集していることが判明した。且つ、玉作り工房等の発見は、この地域が早良平野において政治・経済の中心的役割を負っていたといえよう。一方、山麓部に目をやると、油山山麓には多くの群集墳が存在する。東側にある重留古墳群でも現在27基もの古墳が確認されている。また、ここでは二期段階の須恵器窯跡を検出している。北側に下った飯倉遺跡群では最近の調査で5世紀後半~6世紀中葉の前方後円墳である梅林古墳を発見した。この古墳は早良平野において、坪塚古墳、樋渡古墳に続く時期の首長墓であり、それらとの関連が注目される。

註1 福岡市教育委員会 「福岡市文化財分布地図一西部I-」1987年

2 福岡市教育委員会 「四箇遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第172号」1987年

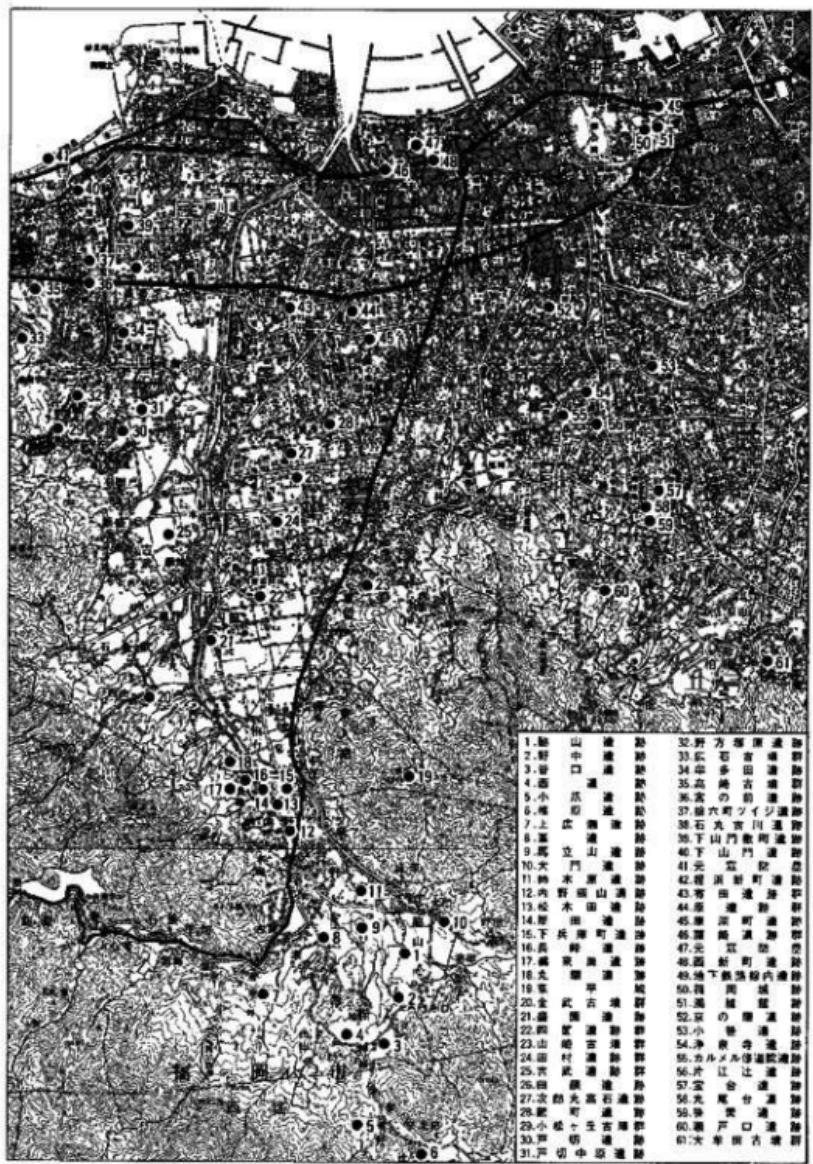


Fig. 2 重留遺跡群と平良平野の主な遺跡 (縮尺1/75000)



入部地区圃場整備地域 南から博多湾を望む



空からみた圃場整備地域 東から叶ヶ岳を望む



西側から圃場整備地域を望む 背景は油山



北から内野 脇山方向を望む 中央に圃場整備地域がある

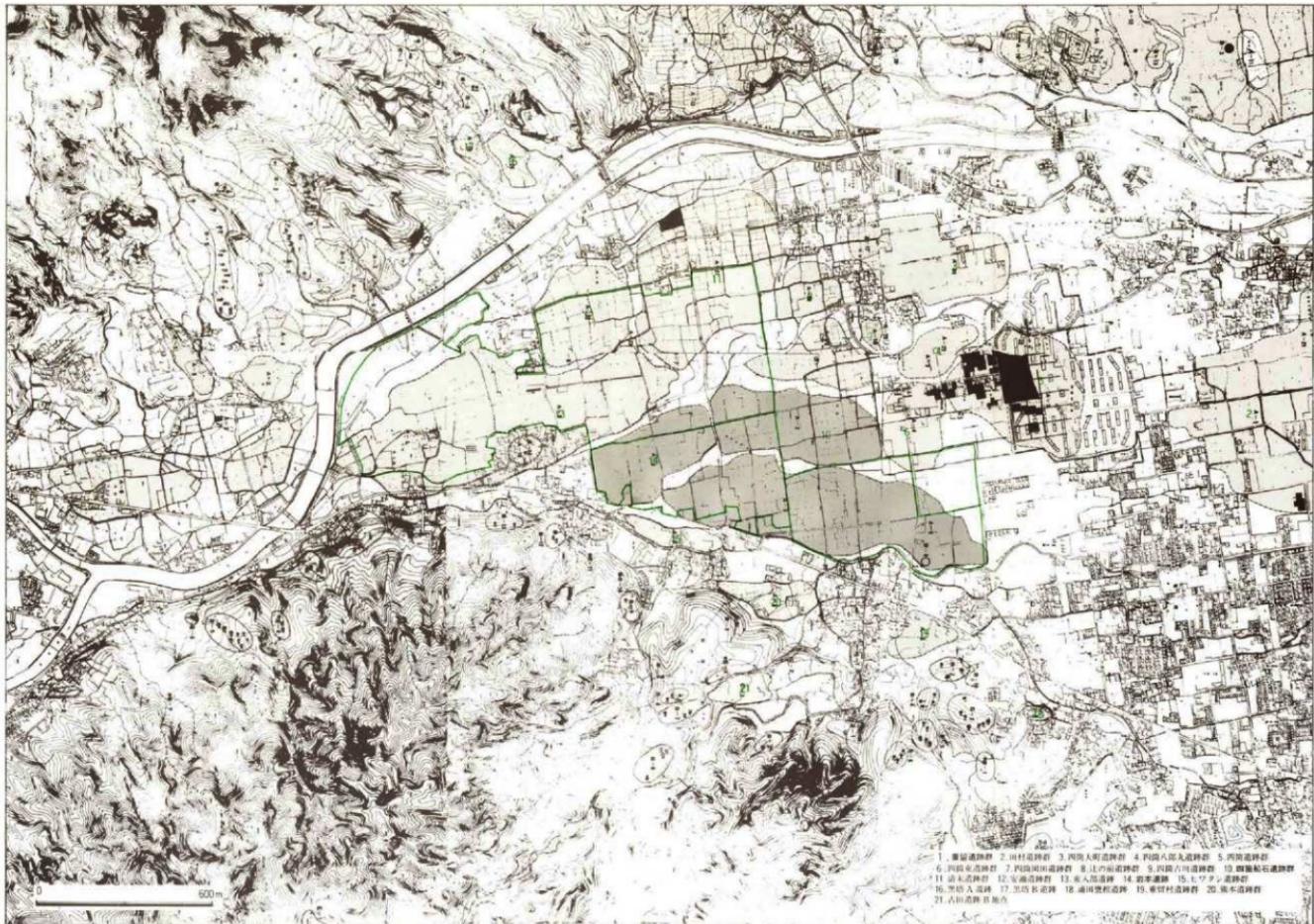


Fig. 3 周辺道路の分布図（福岡市文化財分布地図・西部Ⅰ）（縮尺1/14000）

第3章 第3次調査の概要

1. 重留遺跡群
2. 四箇船石遺跡群
3. 岩本遺跡群



第4地点 中世河川跡SD26の実測風景 南から

第3章 第3次調査の概要

(1) 調査経過

平成元年度の入部地区圃場整備地域には早良区大字重留字松本、大字東入部字熊本・字岩本、大字四箇字船石等が含まれる。事業計画面積は約16.2ha、この内、構造物の面積は約1.519haである。発掘調査の対象は、用排水路等の構造物や道路等の半恒久的な構築物の他、切土施工による田面である。但し、これらに対して、全面的に発掘調査を実施した場合、調査費や調査期間に支障をきたすことは否めないため、本調査に先立って試掘調査を実施した。試掘調査は田植え前までに終了することとして、4月末から5月の間に行なった。但し、第1章で述べた様に、前年度同様に農作物の撤去が遅滞したために、結果的には全域の試掘調査を終了することが出来なかった。遺跡はほぼ全域に存在するが、大きな河川跡や谷等が存在することなどから、一部を調査対象から除外することも可能であった。この結果に基づいて、県市の農政担当者と協議を行い、盛土等による設計変更を計った。但し、構造物は変更が不可能であるため全計画線をの本調査対象とした。道路・用排水路等の構造物に対する調査面積は19,852m²で、切り土施工による田面の調査面積は9,612.5m²である。田面部分において、耕作土を除去して直ぐ下に遺跡が存在する場合も同様に発掘調査の対象としているが、遺構の疎密の状況によっては調査期間の都合により調査対象から除外した。且つ、田面の調査でも文化層が1~3面存在する場合も、工事に支障の無い面は将来に委託した。



期限が迫る調査　人海戦術による作業



窯檜廬の発掘



製鉄遺構実測風景



Fig. 4 第3次調査の試掘調査位置図（縮尺1/5000）



Fig. 5 第3次調査の調査区位置図（縮尺1/5000）



試掘調査 A区(事業地北側)の風景



試掘調査 B区(事業地南側)の風景

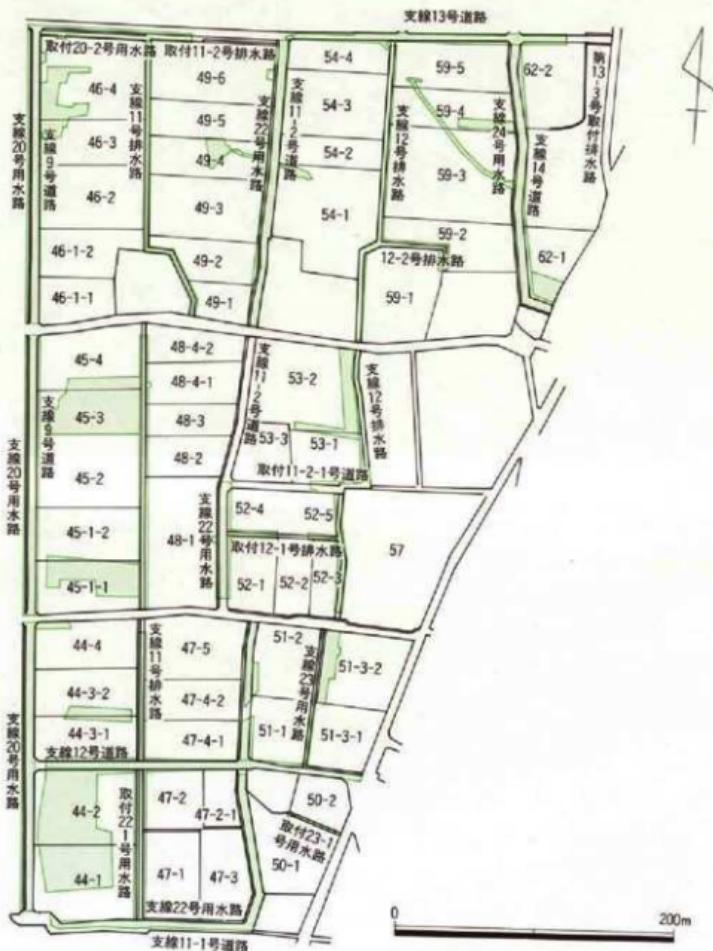


Fig. 6 國場整備計畫圖 (縮尺1/4000)

Tab. 2 第3次調査 調査地点一覧表

地点名	構造物・田面名	計画面積(㎡)	調査面積(㎡)	地区名	期 間	備 考
1	支線 12号 通路	1,440	1,320	I~III	'89.8.10~'90.1.17	1面調査
2	支線11~1号 通路	2,220	2,040	I~VII	'89.8.29~'90.1.10	1~2面調査、一部トレンチ
	支線 11号 用水路	2,673	2,488	I~VII	'89.10.13~'90.1.14	1~3面調査、一部トレンチ
3	取付 11-2号 用水路	500	618	VII	'89.12.28~'90.3.18	VII区は3面調査
	取付 20-2号 用水路	150				
	取付 22-1号 用水路	220	210	I		
4	44-1 田面	4,063	1,696	I~II	'89.10.21~'90.3.21	1面のみ調査 2面は存在する
	44-2 田面	4,026	2,208			
5	44-3-1 田面	2,537	225		'90.1.29~2.10	1面のみ調査
	44-3-2 田面	2,500	225			2~3面あり
6	取付 23-1号 用水路	144	72		'89.10.4~10.23	1面のみ記述
7	支線 23号 用水路	220	280		'89.10.12~10.28	1面のみ調査
8	支線11-2号 通路	2,450	1,716	I~II	'89.11.28~'90.1.16	1面調査、トレンチ開き
	支線 22号 用水路	1,410	1,112	III~IV	'90.1.27~2.20	1面のみ調査
9	取付 12-1号 用水路	320	208	I~II	'89.12.12~'90.2.10	一面はカット
10	支線12号 通路	1,948	1,712	I~IV	'89.12.12~'90.2.10	1面、第一第2面調査
	取付 12-2号 用水路	256	240	V	'89.12.12~'90.2.10	2面調査
11	53-1 田面	1,940		II		
	53-2 田面	4,649	447	II	'89.12.12~'90.2.10	1面のみ調査
	取付 11-2-1号 通路	392	198			
12	支線 9号 通路	3,750	3,690	I~VI	'90.2.19~3.15	VII区は2面調査 他の1面のみ
	支線20号 用水路	1,318	1,230			
13	45-1-1 田面	2,860	676		'90.1.31~3.20	1面のみ調査
	45-1-2 田面	2,860	553			一部トレンチで2面を確認
14	45-3 田面	2,455	2,012			1面のみ調査
	45-4 田面	3,236	371			2面あり
	46-2 田面	3,487	約200			未調査
15	46-3 田面	2,463	280		'90.3.9~3.26	遺構確認
	46-4 田面	4,350	775		'90.2.16~3.26	調査のみ
	52-1 田面	2,643	351.5	I		
17	支線 14号 通路	1,230	1,212	I~III	'89.11.2~2.10	2面調査 3面以上あり
	支線24号 用水路	422	412			
18	59-4 田面	2,382	240		'90.1.15~2.10	2面調査
19	支線 13号 通路	2,298	1,200	I~III	'90.1.26~2.7	1面のみ調査
	取付 24-1号 用水路	130	64			
20	59-3 田面	5,996	180		'90.2	法面調査 特生時代新規跡 確認

Tab. 3 第3次調査 地点別遺構・遺物一覧表

調査地点	調査番号	構造物・遺物名稱	遺構面積	遺 墓	遺 物	時代・時期	参考
1 I - II	支継 12号 通路 敷石23-2号用水路	1~2	河川跡、谷1~5、底、土壌層、瓦器、陶器、鐵鋸刃、鐵石 精4、土器6、鐵石製品1種	土師器、瓦器、鐵鋸刃、鐵石製品	縄文時代～ 縄文時代	I曲のみ調 査	
2 I ~ IV	支継 11号 通路 22号 用水路	2	土壌層1、6、鐵石製品、遺物2 精2、河川跡1、石拾み土堆1、土師器、瓦器等、鐵鋸刃(刀刃) 等1			古墳時代～ 古墳時代	2山調査
1 ~ II	支継 11号用 用水路 支継22 1号用水路	2~3	地主作遺物2、土堆2、底灰土 精2、				2山調査
3 III - IV	支継11号用水路	2		土師器、瓦器			
VI - VII	支継11号用水路 支継22-1号用水路 支継29 2号用水路	3	河川跡1、型式往來1、土堆 2、土器1、鐵石製品2、精2 等1	手造土器、方盤、白陶 土器、滑石製品	弥生時代中期 ～縄文時代		
4	44-1~2 画面	1	河川跡1、河川跡2、精2、土器1、 鐵石製品1、瓦器21	土器器、瓦器、鐵石製品、高貴 土器等、白陶、滑石製品、陶土式 鐵鋸刃、瓦器	弥生時代 縄文時代	平安時代後 半主体とす る	
5	44-3 画面	2	河川跡2集、精1条、土堆5 等1	土師器、瓦器	縄文時代	I曲のみ調 査	
6	23-1号 用水路	2	猪状遺構6、土堆5	土師器、瓦器	縄文時代	I曲のみ調 査	
7	23号 用水路	2~3	型式往來1、2、鐵石製品2、 土堆2、土堆2、鐵石製品2	土堆式土器、折牛式土器、土財 器等	縄文時代～ 縄文時代	I曲のみ調 査	
1 II	支継 11-2号 通路 支継 22号 用水路	2	河川跡1、pH				1度及びト レシジメント
8	III - IV	支継 11-2号 通路 支継 22号 用水路	2~3	型式往來4村、河川跡2 精2、土堆10	土師器、瓦器等、製製品、 陶土式土器、折牛式土器	縄文時代後期 ～縄文時代	1度のみ調 査
9	II 取付12-1号用水路	2	河川跡、pH				トレンチ調 査
10	I - II	支継 12号 用水路	1~2	河川跡1、谷堆1、型式往來等 2、鐵石製品2、遺物2集、土堆14 等5、河川跡1、等1	土師器、淡灰土、石製品、木製 等	弥生時代～ 古墳時代	I曲のみ調 査
V	取付12-2 用水路	2	土堆4、谷堆1	鐵土器、陶土器、青銅器、瓦器等	縄文時代～ 古墳時代		
11	支継11-2-1号道構	2	河川跡、pH	陶土器、土師器	縄文時代～ 古墳時代	トレンチ調 査	
III - IV	支継 9号 通路 支継 20号 用水路	2	型式往來等6村、河川跡3、 土堆6、鐵石製品1、河川跡 1、鐵石製品1	陶土器、陶土器、土師器、 瓦器、白陶、瓦器、瓦 質土器、土師質土器、白陶、滑 石製品、滑石玉器品、製製品、 石製品、土器、鐵鋸刃、鐵製品、 石製品等	縄文時代～ 江戸時代	I曲のみ調 査	
12	V - VI	支継 8号 通路 支継 53号 用水路 53-1 等 53-2 等	2~3	型式往來7村、河川跡1、二 等5、鐵石製品8等、土堆3、 遺物2集、等3遺物、谷1、 土堆5、木製1、等1	土器土器、淡灰土器、土師器、 瓦器、白陶、瓦器、瓦 質土器、土師質土器、白陶、滑 石製品、滑石玉器品、製製品、 石製品、土器、鐵鋸刃、鐵製品、 石製品等	縄文時代～ 縄文時代	1. 2度の 調査による 火災焼成部 の内、古 墳時代の4 割は、すく て作り工 用部。其 他の生時代 出現の部
13	IV	45-1 画面	2	陶土式土器2村、淡灰土1等、 河川跡、鐵石製品、土堆1~3等 等1等	陶土器、淡灰土器、土師器、 瓦器等、鐵鋸刃、鐵製品2等、鐵製品 等	弥生時代～ 古墳時代	I曲のみ調 査
14	IV	45-2 画面	2	陶土式土器1村、鐵石製品3等 等1等1、淡灰土1等、淡灰土器、土 堆1等1、土堆2等2、等4、方 形鐵石製品1、一塊2	陶土器、淡灰土器、土師器、 瓦器等、鐵鋸刃、 等1等1、土堆2等2、鐵製品 等	縄文時代～ 古墳時代	I曲のみ調 査
15		45-4 画面	2~3	型式往來2村、鐵石製品8等、 鐵石製品1、土堆10等、河川跡	陶土器、淡灰土器、土師器	弥生時代前 期～古墳時代	遺物発掘の み、一部調 査
16	I	支継 14号 通路 支継 24号 用水路 56-1 等	2~3	河川跡、河跡、土堆、淡灰土器 等1等1、土堆2等2、等4、方 形鐵石製品1、一塊2	陶土器、淡灰土器、土師器、 瓦器等、等1等1、土堆2等2、 等4、方形鐵石製品1	江戸時代	1~2度の み調査
17	II - III	支継 14号 通路 支継 24号 用水路	2~3	河川跡、河跡、土堆、淡灰土器 等1等1、土堆2等2	陶土器、淡灰土器、土師器、 瓦器等、土財器、瓦質土器、 等1等1、土堆2等2	縄文時代～ 江戸時代	1~2度の み調査
18		59-4 山窓	2	精1、pH	陶土器、土師器	縄文時代～ 古墳時代	
19	I - II	支継 33号 通路	2~3	河川跡1、淡灰土器1、土堆5 等6	陶土器、淡灰土器、土師器 等1等1、土堆5等6	縄文時代～ 古墳時代	I曲のみ 調査
20	II	59-3 画面	1~2	等		縄文時代後期 ～弥生時代前 期	追跡発掘の み

(2) 第1地点 I ~ III区 (12号道路)

東西方向に約240mの道路予定地である。調査区をI~III区に分けて実施した。調査区の長さ216m、幅は約8mで、面積は約1730m²ある。I区は道路予定地の西側部分、II区は中央部分、III区は東側の県道沿いとした。

I区は調査区の西側にあり、遺構面は礫層上面に堆積した暗灰褐色粘質土、又は灰色粘質土である。遺構面は開田による切り土整地によって2段に形成されており、上段の遺構は遺存状態が良い。遺構は井戸1、掘立柱建物3、製鉄遺構5である。掘立柱建物1、製鉄遺構5は第4地点と重複する。いずれも11世紀後半～末である。

II区の遺構面は谷地に堆積した暗い灰褐色粘質土であるため極めて遺構の検出が困難である。又、調査区の西側は削平のため下層の礫が表出しておらず、遺構の遺存状態は悪い。遺構は旧水田の基盤を示すと思われる段が3段に形成されており、段下には浅い溝が伴っている。標高は最上段が約31.30m、中段が約31.0m、最下段は約30.78mである。最下段には水田の地割り溝が検出できた。中世の土師器皿が出土している。又、上段には櫛状の柱穴が存在する。

III区は黄褐色粘質土が遺構面である。西側は谷を形成し、水田の地割り等がみられる。東側は土壤6、溝3条を検出した。溝SD37・38は、弥生～古墳時代の溝である。



第1地点I・II区 全景 東から



第1地点II区 全景 西北から

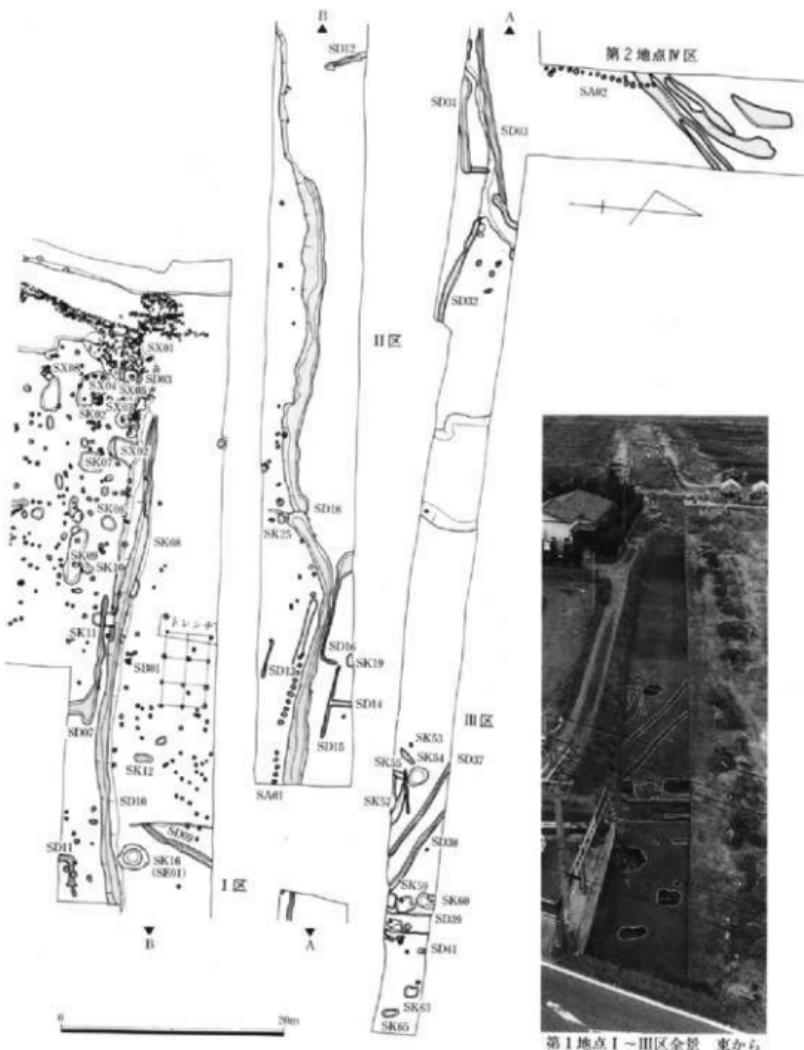


Fig. 7 第1地点 I ~ III区造構配置図 (縮尺1/500)

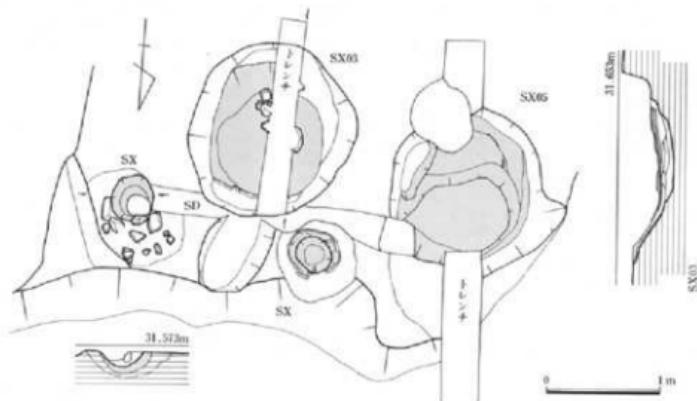
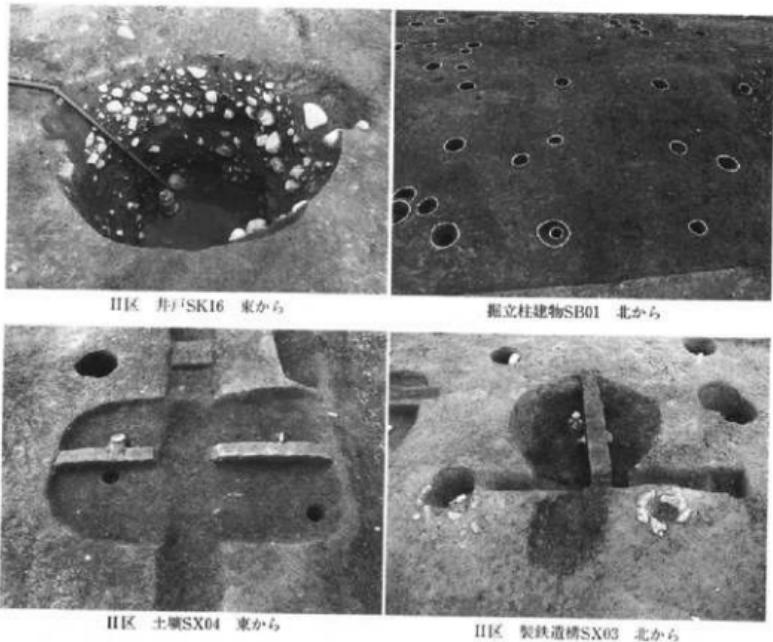


Fig. 8 製鐵関連造橋SX03-05 (縮尺1/50)

(3) 第2地点 I ~ IV区 (11-1号道路)

道路予定地の調査である。圃場整備地域の南端に位置し、東西から南北方向に鉤形に曲がる道路である。調査区域をI~IVの4ヶ所に分けた。I・II区は東西方向で、長さ約152m、幅約6mに亘って調査した。I・IIの中央部には自然堤防状に礫群が存在し、その幅32m、周辺との比高差50~80cmを測る。この礫群の西側をI区とする。

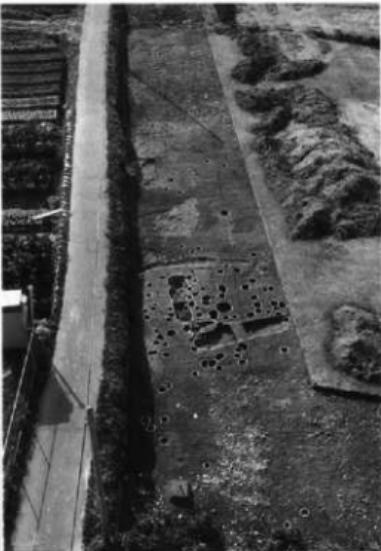
I区の削平は著しく、下層の礫層が表出しておらず、溝状遺構及び、集石遺構SX01を検出するにとどまった。

II区は自然堤防の東側で、第1面の遺構面の全面に敷石が認められる。敷石の厚さは5cm程度であるが、柱穴、溝、土壙等の近辺には施されていない。部分的には3~4m幅で、矩形に礫が集中する部分も認められるから、建物の周囲に施されたものであろう。敷石内より、白磁碗片や青磁碗が出土する。12世紀代が考えられる。その他の遺構には土壙2、溝状遺構2がある。又、第2面からは古墳時代後半の土壙墓を検出した。自然堤防状の礫群の東傾斜面に位置しており、主体部の後背部に周溝を巡らしている。

III区では第2面に水田遺構を検出した。第3面は幅約60mを測る谷地形を形成している。西北



第2地点 I区全景 東から



第2地点 II区全景 東から



Fig. 9 第2地点 I ~ IV区造構配設図 (縮尺1/400)



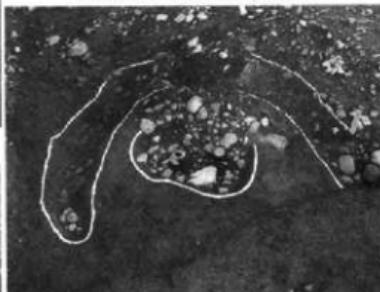
I区 西側溝SD05 西から



II区第1面 敷石の状態 西から



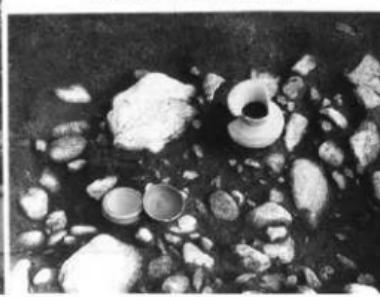
I区 横石造構SX01 北から



古墳時代の土塁墓 SX02 東から



第2地点 II区第2面 東から



土塁墓内の副葬品 西から

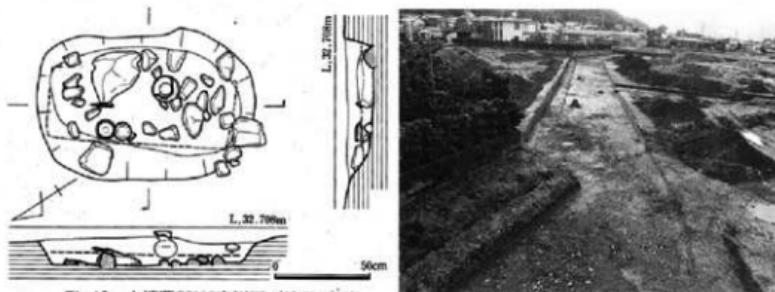


Fig.10 土塚墓SX02実測図 (縮尺1/30)

第2地点 III区 全景 北から

方向に主軸があり、これはIV区の河川に接続するものと考えられる。第2面の水田跡は上面に砂を被っていないため畦畔等の検出は出来なかった。

IV区の上面には中世の水田造構が存在すると思われるが、詳細は不明である。最下層は大河川跡となり、砂礫、粘土層が交互に堆積している。

土塚墓SX02 (Fig.10)

主体部の平面形は隅丸長方形を呈しており、長さ1.17m、幅82cm、深さ11cmを測る。削平のため遺存状態は悪く、又、床面も不定であった。内部には副葬品として須恵器壺1点、杯身・杯蓋各1点、鉄製刀子1点が出土した。周溝は主体部の西側後背に掘られており、幅50~60cmを測る。周溝内径を復原すれば直径約2.3mを測り、この規模の墳丘が存在したことが予想できる。



IV区南半部分 南から

IV区北半部分 河川跡 南から

(4) 第3地点 I ~ IV区 (11号排水路)

排水路予定地であるが、全長766mに亘るため、I ~ VII区に分けた。ここでは I ~ IV区について述べる。

I区の造構面は第4地点の東側に接している。造構面は黄灰色粘質土で、北側に緩く傾斜し、

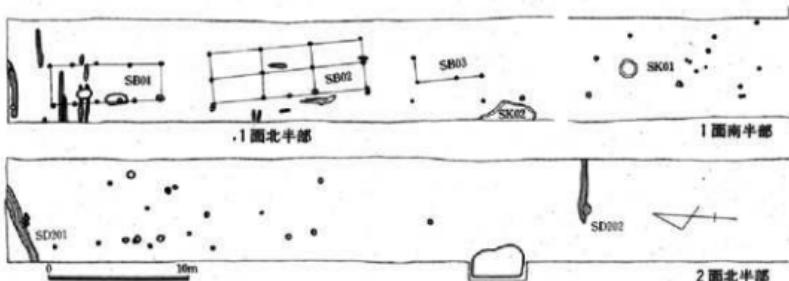
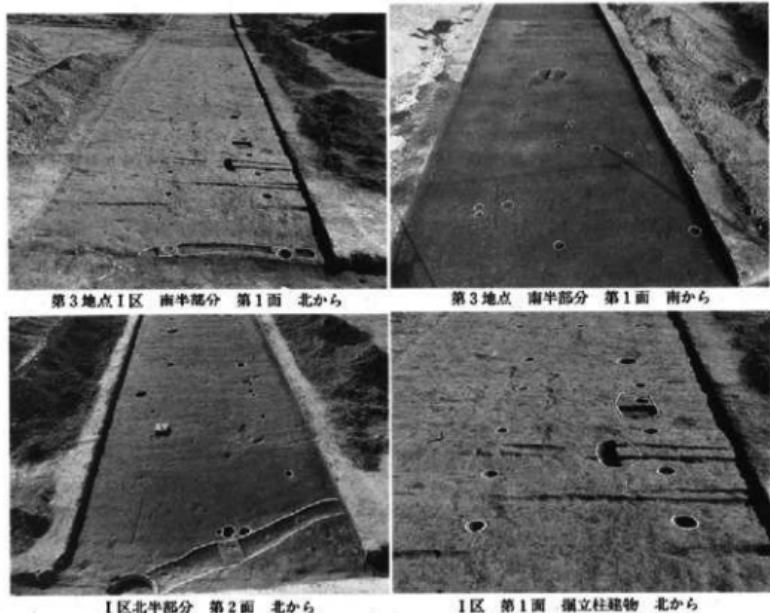


Fig.11 第3地点 I区第1・2面造構配置図 (縮尺1/400)

北半部分ではこの上面に灰褐色の粘質土が最大約10cmの厚さで堆積している。南半では1面、北半では2~3面の遺構面が存在する。I区の南半部分では遺構は土壙、小Pitなどを検出した。北半部分では第1面で、掘立柱建物3、土壙4、溝2等を検出している。時期は中世~近世であろう。掘立柱建物は3棟で、1間×3間の規模が1棟、2間×3間の規模が1棟である。柱穴出土の遺物より近世の建物と考えている。北半部分の第2面は南半部分と同様に遺構面は黄灰色粘質土である。遺構は溝状遺構2条、及び小Pitである。I区では第4地点検出の建物群や遺構群の東側への広がりの限界を示すことが把握できた。

II区は第2面までの遺構の存在を把握したが、全体に遺構は少ない。第3面は河川跡となっ



II区 第1-2面の状況 北から



第3地点III・IV区 全景 北から



III区第2面 鋼治炉SX01



III区第2面 鋼治炉SX02

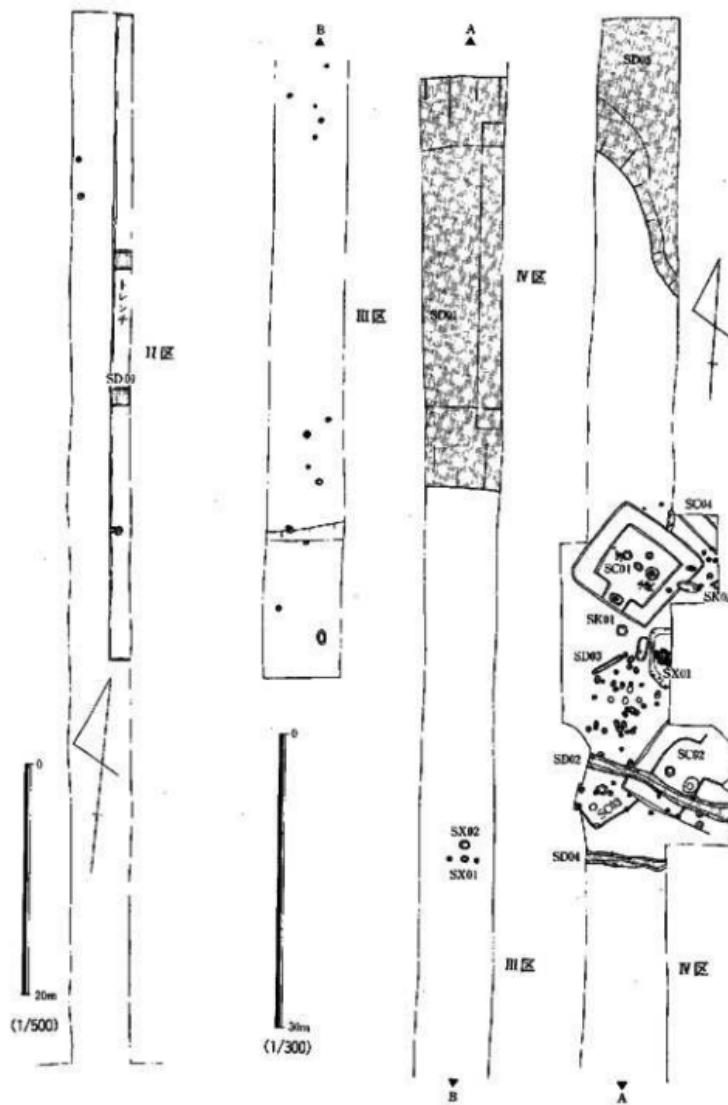
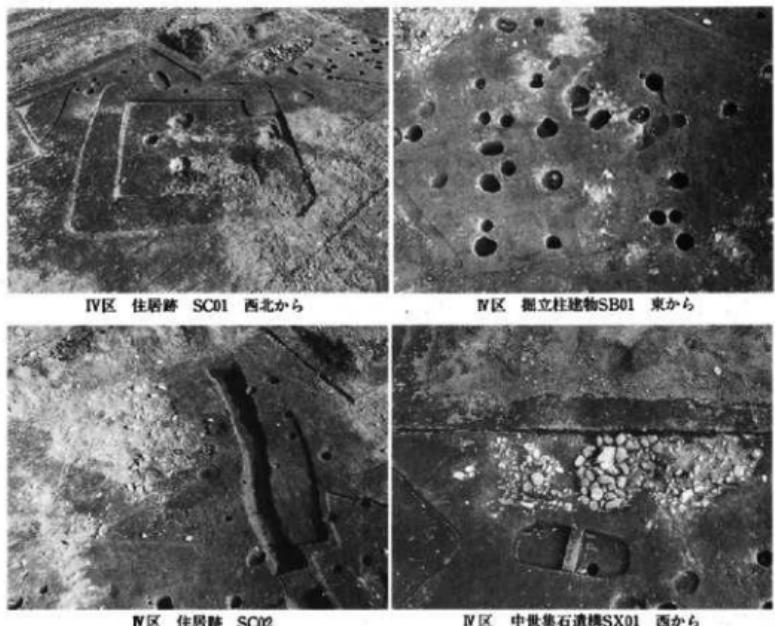


Fig.12 第3地点 II~IV地点遺構配図 (縮尺1/500・1/300)



ており、砂礫の堆積が著しい。最大の深さ 2 m以上を測る。

III区もやはり 2 面存在する。第 1 面は中世で、灰黄色粘質土が遺構面を形成する。小鍛治跡 2, Pit群が存在する。小鍛治跡の直径は約45~65cmで、SX01から鰐の羽口が出土した。第 2 面は弥生時代の遺構であるが、包含層が厚く堆積しているため、期限の都合により調査を中止した。

IV区は 1 面のみを確認。遺構面は黄褐色粘質土又は砂礫面である。III区・IV区の境は幅約22mを測る浅い谷が存在する。検出した遺構は中世の集石遺構 1, 土壙 2, 古墳時代住居跡 4軒、溝 2 条、河岸跡 (SD05) 1 条、谷跡 (SD01) 1 である。竪穴住居跡は平面形が略方形を呈しており、四辺にベッドを有し、一辺に出入口を設けている。規模は5.0×5.1mを測る。削平のため遺存状態は悪い。

(5) 第3地点V~VII区(11号排水路)

V・VI区は試掘調査の結果、河川跡であることが判明したため調査から除外した。但し、VI区では砂礫層の中より弥生時代中期の土器が多数出土しており、河川跡の時期を考慮する上で興味深い。

VII区はV・VI区から西に折れ曲がる調査区で、調査区の東側をV・VI区検出の河川跡が横断

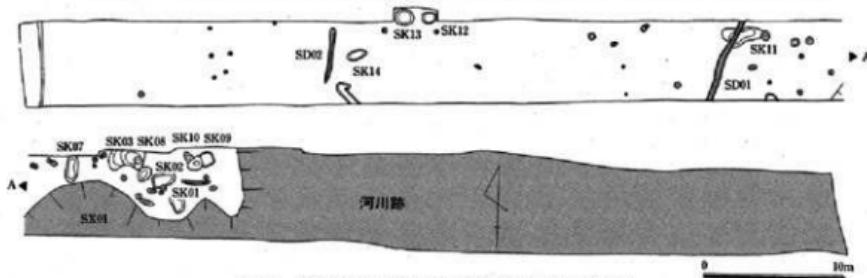
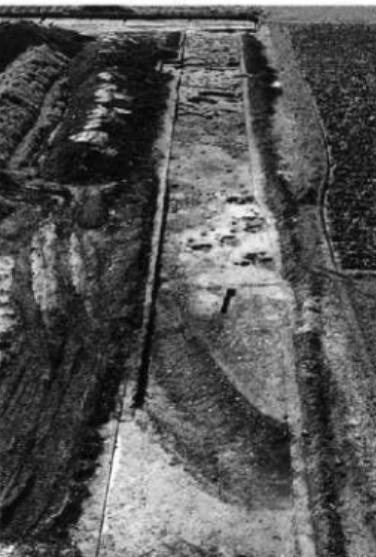


Fig.13 第3地点VII区第1面遺構配置図(縮尺1/400)



第3地点 VII区第2面 全景 東から



第3地点 VII区第3面 全景 東から

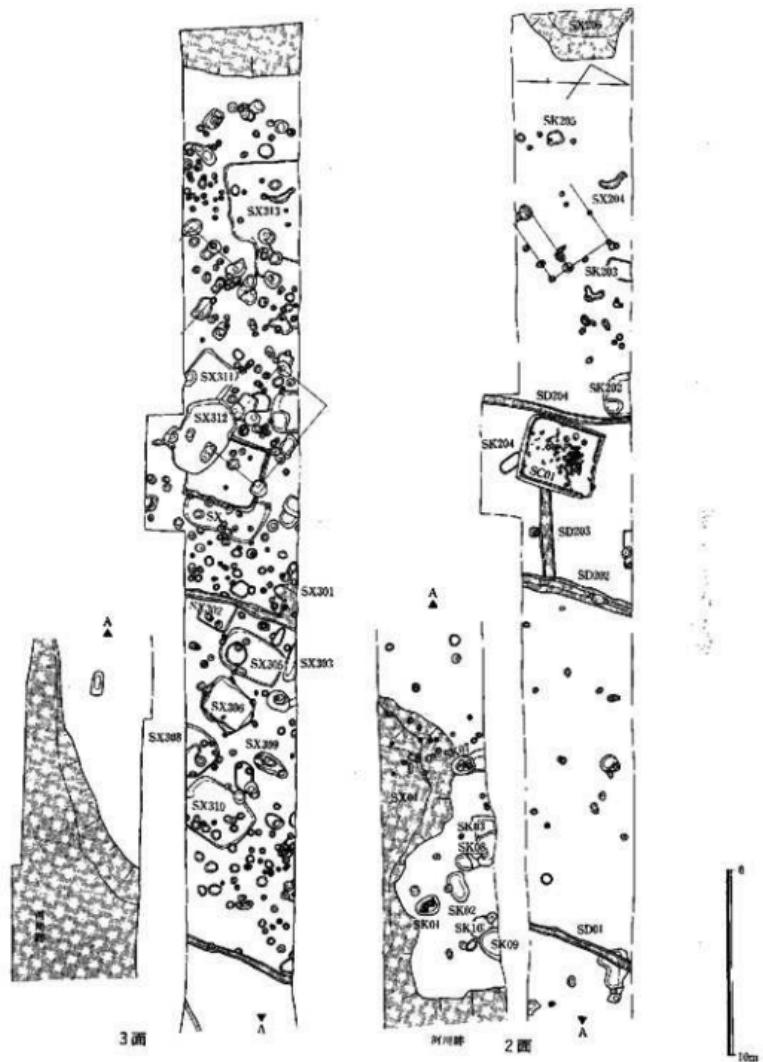


Fig.14 第3地点面第2・3面遺構配置図 (縮尺1/300)

している。遺構面は3面を検出した。

第1面は耕作土の下に存在し、標高25.8mを測る。暗灰褐色粘質土が面を形成する。遺構は土壙8、溝1条、Pit、河川跡1条である。土壤の覆土は暗灰色粘質土で、遺物は中国青磁碗、白磁碗、土師器の皿・杯等がある。13世紀代の時期である。土壤は平面形が隅丸長方形又は不整円形を呈している。

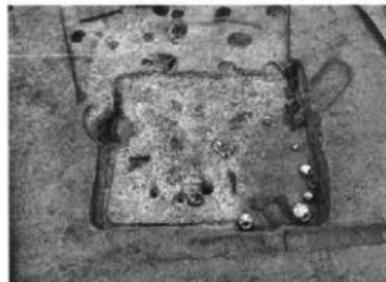
第2面は弥生時代後期から古墳時代の4世紀末～5世紀初頭までの時期である。標高約26.50



VII区第2面 土器埋りSX01 西から



SX01内 弥生式土器の出土状態 南から



VII区第2面 古墳時代住居跡SC01 西から



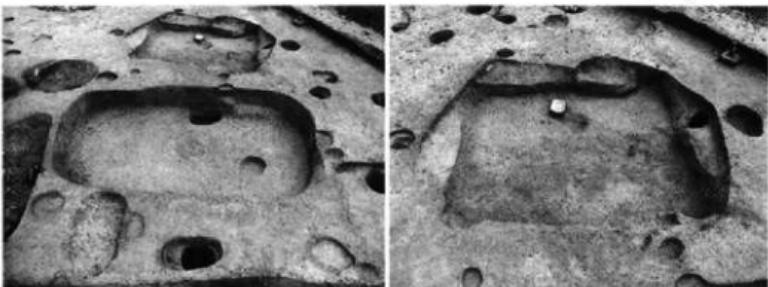
住居跡SC01の遺物出土状況



VII区第2面 土壙SK202

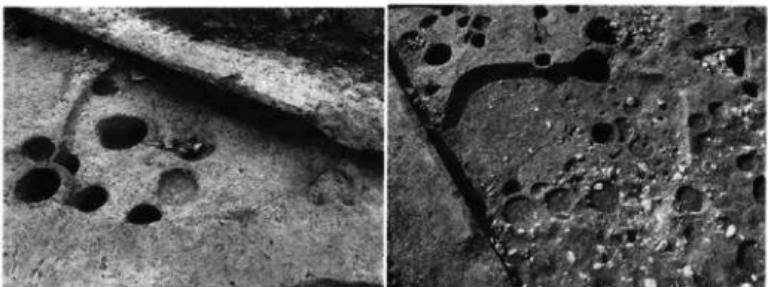


VII区第2面 溝SD202の土層面



VII区第3面 土壌SX305 西から

VII区 土壌SX305 南から



VII区 土壌SX308 北から

VII区 土壌 SX310 東から

mを測り、暗灰褐色土を遺構面とする。遺構は住居跡1軒、溝2条、土壙2、掘立柱建物1棟、土器溜1ヶ所である。溝の断面形は逆梯形で、黒色粘質土が覆土である。住居跡SC01は平面形が略方形を呈し、規模は長さ4.2m、幅3.8mである。住居跡は全体に焼けており、炭化木材等の出土から火災にあったものと考えられる。上部には川原石が多数投げ込まれており、埋め戻しの填圧を示すものであろうか。西側壁の中央には幅60cmほどの粘土塊が存在しており、且つ赤変した粘土内に焼土粒子をも含んでいるところから、カマドの可能性を有している。遺物の遺存状態は良く、火災以前の原位置状態を示しているものと考えられる。主柱穴は不明である。掘立柱建物は1間×2間に庇付きである。土器溜SX01は河川跡の西側縁に位置し、河川跡との切り合いは不明確であるため、河川の縁に投棄されたものと考えることもできる。

第3面の遺構面は黄褐色粘質土である。この面は第2面の河川跡から次第に西に傾斜するもので、本来は浅い谷を形成していたと考えられる。遺構の遺存状態は悪い。遺構には土壙9、掘立柱建物2軒、棚1条がある。土壙は大型の堅穴で、平面形は隅丸長方形又は、不整梢円形がある。長さは3.0~4.4mを測る。弥生時代中期中頃~後半の土器が出土。掘立柱建物は1間×2間、もしくは2間×2間規模の建物を3棟検出した。

(6) 第4地点 (44-1・2田)

第2地点I区の北側、第3地点I区の西側に接している。第1地点II区とは同一の遺構群を構成する。遺跡は11世紀後半～12世紀前半を主体としており、遺構の分布する範囲は、第2地点I区と第3地点I区が各々南限と東限を示している。

遺構面は北半が灰褐色粘質土、南半が暗い黄褐色粘質土である。標高は31.3～31.6mを測る。遺構は弥生時代の溝の他は全て平安時代終わりから中世初頭を主体とする。弥生時代の遺構は溝1、及び河川跡1である。河川跡は幅7.5mを測り、上層は粗砂層が覆っている。中期後半の大甕が出土している。溝SD21は幅約80cmで、断面形がV字形を呈している。同じく弥生時代中期である。古代末から中世初頭の遺構には第1地点の遺構も含めると掘立柱建物15、井戸3、土壙21、溝状遺構18、製鉄遺構6、水路跡1がある。これらの遺構はほぼ同じ時期に存在するものと考えられる。遺構は北半と南半部の2群に構成され、その間には空隙地が設けられている。又、これらの遺構群の西側に沿って条里方向に合致した水路跡が存在する。この水路は幅約6m以上、深さ約45cmを測るもので、覆土からは龍泉窯系青磁等が出土しており、埋没時期が



第4地点 全景 航空写真

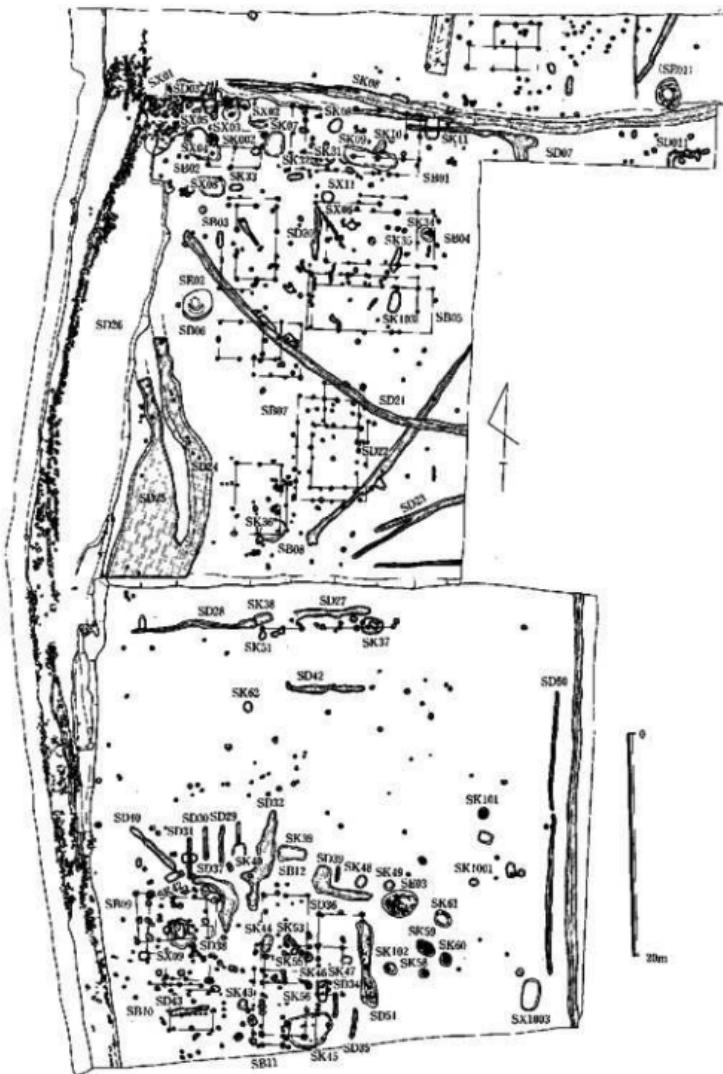
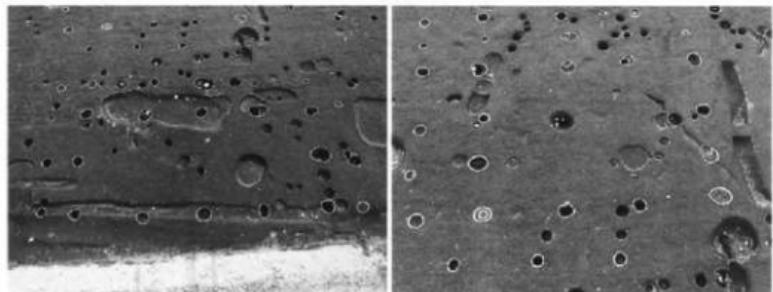


Fig. 15 第4地点遺構配置図 (縮尺1/500)



第4地点 北半部の権立柱建物群 東から



権立柱建物 SB01 北から

権立柱建物 SB03 北から

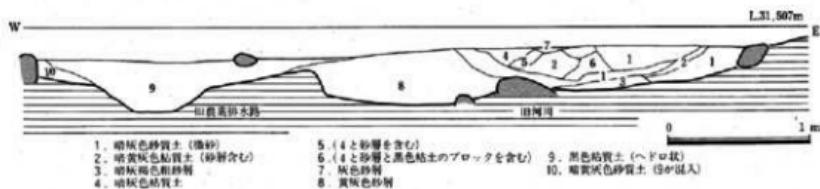
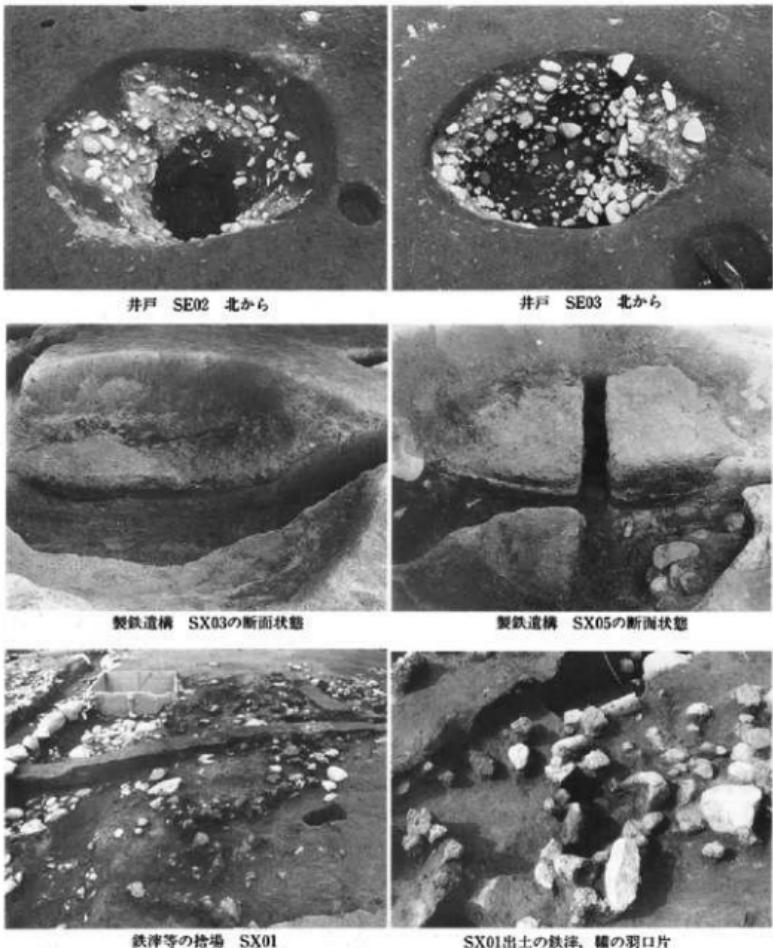
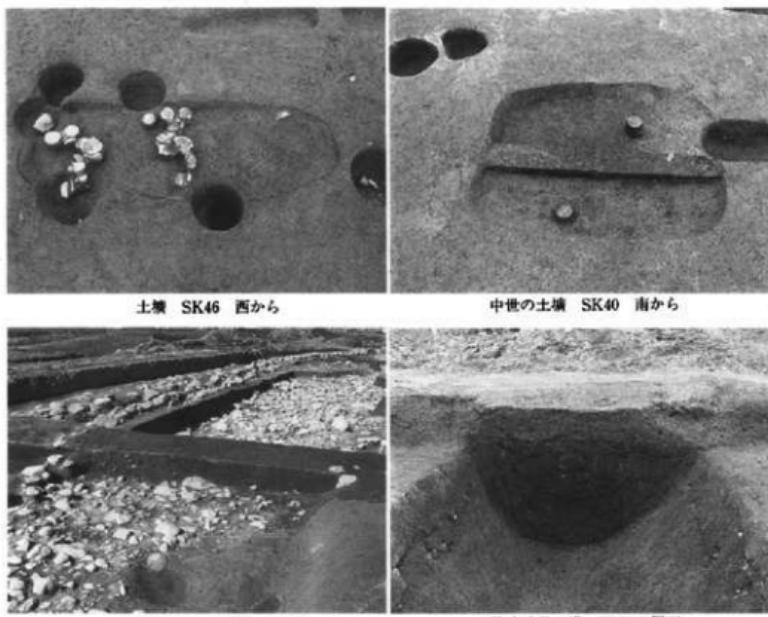


Fig.16 河川跡SD26土層図 (縮尺1/40)



知られる。この水路跡は北側延長線上にある第12地点では水路の基底部の両側に側溝をもち、あたかも道路状を呈している。時期は11世紀後半にあることが判明した。掘立柱建物は全て主軸を北に揃えており、その規模は2間×3間、2間×4間の規模を主体とし、これらには2~4



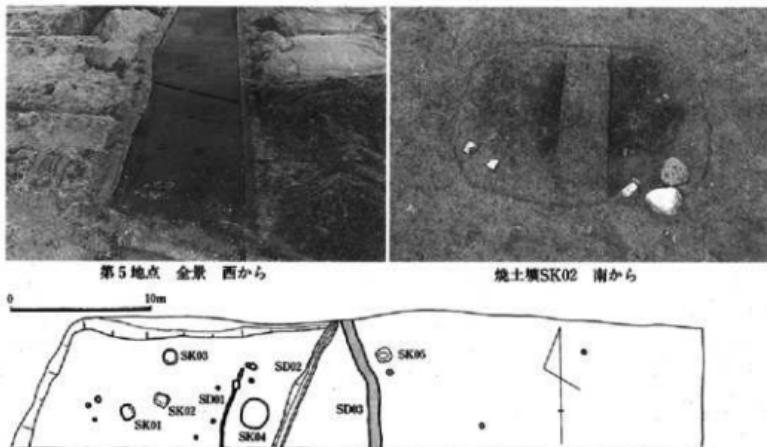
面の底を有している。2間×2間規模の倉庫と考えられる純柱建物もある。

北半部の遺構は11棟、南半部は4棟の建物で構成され、各々井戸が伴う。井戸は全て素掘りで、深さは109m～158mを測る。製鉄遺構は北半部のみに集中し、鍛冶炉2、製鉄炉3、鉄滓捨て場1がある。鍛冶炉は直径40～50cmを測る。製鉄炉は現存の直径1.45m～1.58m、現存の深さ45～50cmを測り、平面形は橢円形、断面形は摺鉢状を呈している。境内は8層以上に分かれ、鉄を含んだ層と微妙層が互層を成している。又、周辺の大型土壤SK02・04、SK07・09には床面に炭化物が堆積し、鉄滓や輪の羽口片が出上ることなどから、これらも製鉄関連のものと考えられる。捨て場は製鉄炉SX03・05に接しており、水路跡の斜面にある。長さは東西が5m、南北が約7mを測り、鉄滓、鉄輪の羽口、青磁、白磁等が散乱している。

土師器等を出土する土壤は南半に集中する。SK46は平面形が隅丸長方形を呈しており、長さ100cm、幅37cm、深さ10cmを測る。削平を受けているが、内部から土師器皿・杯が多量に出土した。形状から土壤墓の可能性もある。

(7) 第5地点 (45-3田)

第4地点の北側に位置する。標高31.0~31.2mを測る。遺構は土壙5、溝3である。時期は第4地点と同じく、古代末~中世初頭である。土壙SK01~03はいずれも焼土壙で、平面形は隅丸長方形を呈している。底面に炭化物層又は木炭が存在しており、第4地点の製鉄遺構に関連した炭焼施設を考えたい。



(8) 第6地点 (23-1号用水路)

用水路予定地である。遺構面は黄褐色粘質土、又は砂質土であるが、西側には砂礫が表出している。試掘調査では2~3面の文化層が予想されたが今回は1面のみの調査にとどめた。遺構は溝状遺構6、土壙5である。溝SD01は南北方向の溝で、幅3.4mを測り、断面形は逆梯形を呈する。

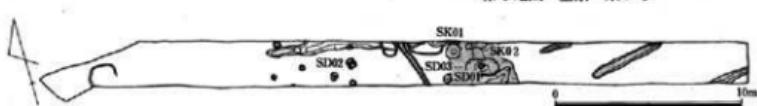


Fig.18 第6地点遺構配位置図 (縮尺1/300)

(9) 第7地点 (23号用水路)

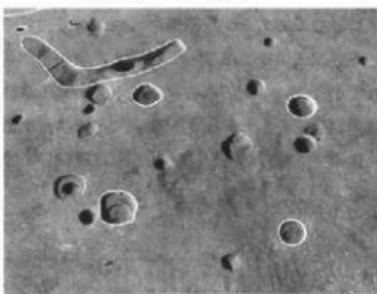
用排水路予定地である。削平が著しく、遺構の遺存状態は悪い。標高30.60~31.20mを測り、西側には浅い谷が存在するため傾斜面を形成する。遺構面は黄褐色粘質土、又は灰褐色粘質土である。遺構には古墳時代の住居跡1、掘立柱建物1、溝状遺構2、縄文時代の溝1の他、時期不明の溝状遺構7、不定形土壤等がある。住居跡は平面形が方形を呈している。削平のため遺存状態は悪く、深さ7cmを残している。周溝は一部に巡っているが、主柱は不明であった。遺物は土器小片に過ぎないが、構造から5世紀代の時期が考えられる。掘立柱建物は1間×1間の規模で、梁行3.2m、桁行3.0mを測る。溝SD04は幅約80cm、深さ33.5cmを測り、断面形がU字形を呈している。又、溝SD05は、遺物が出土していないが、断面形がV字形を呈し、覆土が黒褐色であるところから弥生時代前期の遺構とも考えられる。縄文時代の溝は断面形がレンズ状を呈し、深さ25cm、最大幅4.5mを測る。晩期の深鉢片が出土している。その他の



第7地点 全景 北から



住居跡SC01 北から



掘立柱建物SB01 南から

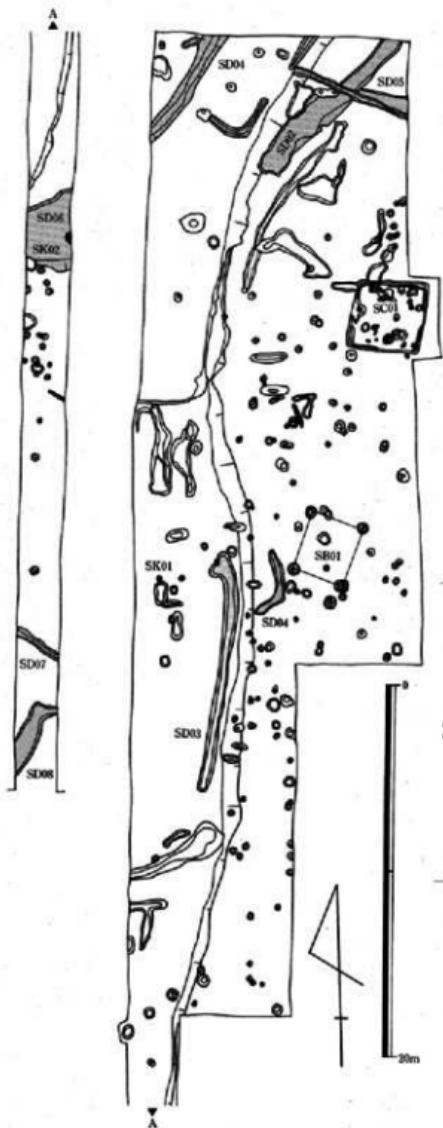


Fig.19 第7地点遺構配置図（縮尺1/300）

造構は出土遺物が細片に過ぎず、年代の手懸りとはなり得ない。ここでは中世の遺物は出土していない。



溝 SD02・03 北から

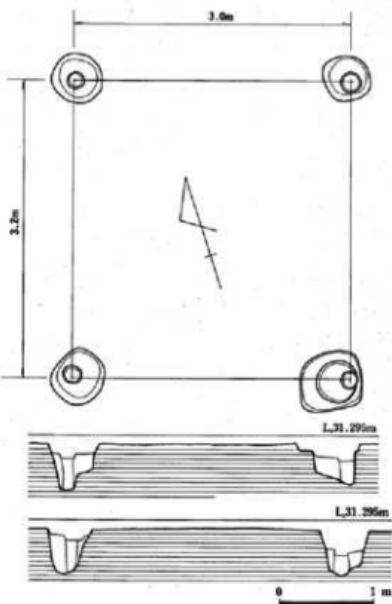
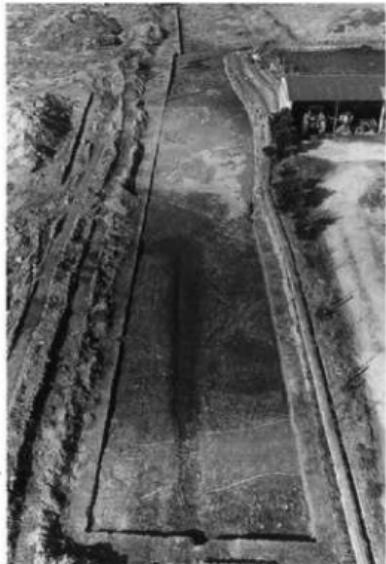


Fig.20 振立柱建物SB01（縮尺1/60）

(10) 第8地点 I ~ IV区 (11-2号道路)

道路予定地である。全長408mをI~IV区の4ヶ所の調査区に分けた。I・II区は旧河川上面に位置している。I区では旧河川埋没後に生活面が形成されているが遺構は非常に希薄である。又、I区の北側は疊層が表出しており、遺構は存在しない。遺構面は黒褐色砂質土である。須恵器片、青磁片などが表採できた。II区の旧河川埋没後の上面では遺構を検出できなかったため、旧河川跡の堆積状態を観察するためのトレンチを設定した。この河川跡は推定の幅約70~100mを測り、北側では第3地点V~VIの調査区にかかっている。第3地点VII区では旧河川埋没後の上面に中世の遺構が存在している。旧河川の覆土には弥生時代中期の土器が多数含まれていた。第8地点I・II区では遺物が少なく、時期は明確ではない。覆土は黒色粘質土を主体とし、底部は疊層である。

III・IV区の遺構面は暗い黄褐色粘質土または灰黄色砂質土であるが、IV区の大部分は灰黒色の砂疊層が遺構面を形成している。遺構はIII区の南端とIV区の北端に旧河川跡が存在する他に、绳文時代晚期溝1、古墳時代の竪穴住居跡4、溝1、掘立柱建物1、中世の溝1がある。住居



第8地点I区 全景 南から



第8地点II区全景 北から

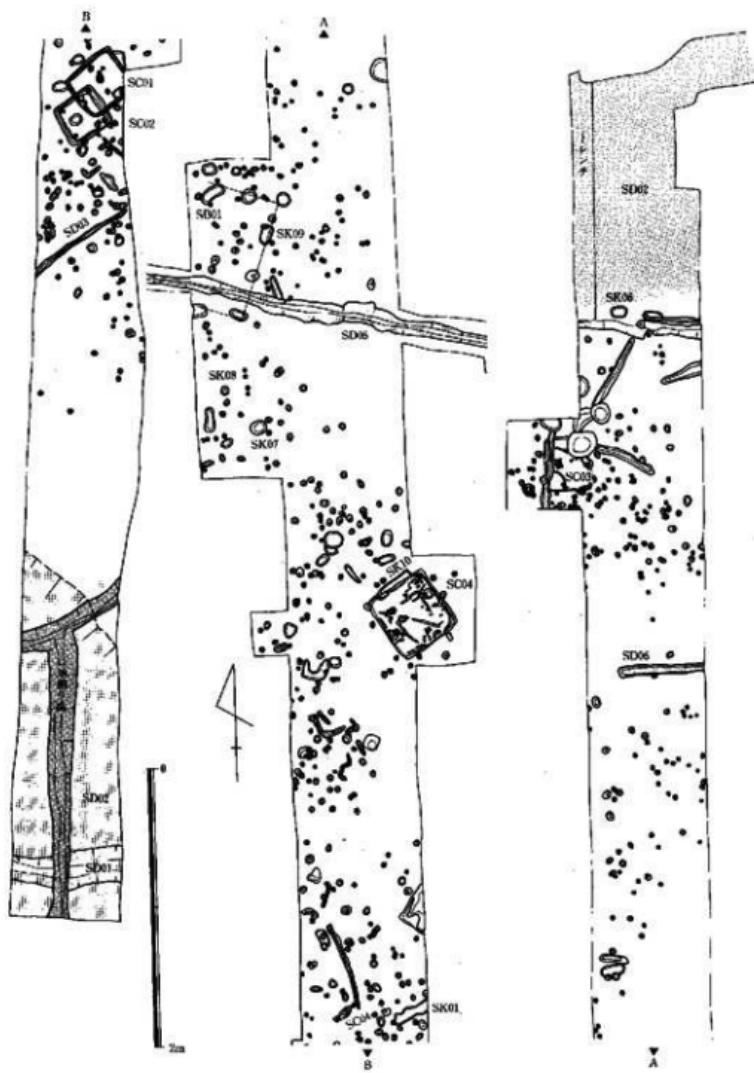


Fig.21 第8地点I~IV区遺構配置図 (縮尺1/400)



住居跡 SC01-2 北から



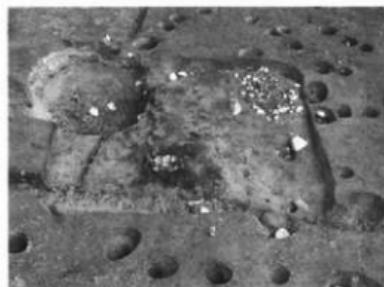
住居跡 SC03 北から



住居跡 SC03出土の土器



住居跡 SC03内出土の土器

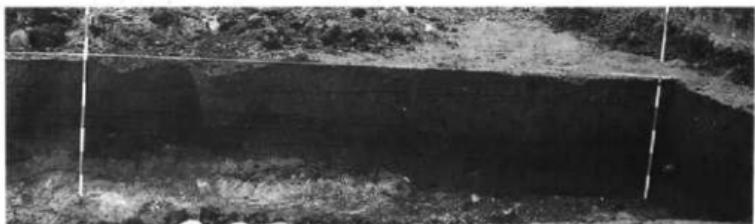


住居跡 SC04 西から



構 SD05の土層面

跡は平面形が方形又は長方形を呈し、壁の一辺の長さが約3.4~5.0mを測る。SC01・2・4は小型の住居跡で、いずれも主柱が不明である。SC01は床面の四隅に浅いPitがあるが、これが柱となるのか確定し難い。住居跡SD03は一辺の長さ4.6~4.8m、深さ40cmを測る。この住居跡は火災にあってるため床面の遺物の遺存状態は良好であった。床面には炭化木材と共に土師器



II区 旧河川内トレンチの土層面 西から

の壺・壺・高杯・小型丸底壺・手づくね土器等が出土した。手づくね土器は炉の周囲や出入口のPitから出土しており、住居跡内の祭祀と考えられる。主柱は4本で、出入口のPitは西壁中央部に設けられ、長さ66cm、深さ30cmを測る。住居跡の時期は4世紀末～5世紀前半までの幅をもっている。縄文時代の溝は著しい削平のため遺存状態は悪い。東西方向の溝で断面形はV字形を呈し、現存の幅約80cm、深さ47cmを測る。遺物は晩期後半の土器を含んでいる。この溝の延長方向を知るため当該調査区の東と西側に各々トレンチを設定したが、東側は約22mまで、西側は約45mのところで溝は削平のため途切れていた。調査区の南端と北端で検出した旧河川は同一のもので、蛇行によるものである。

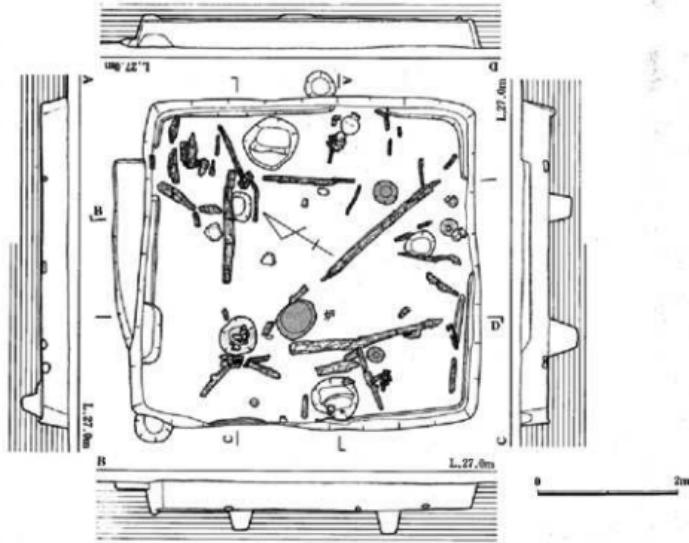


Fig.22 住居跡SC03実測図 (縮尺1/80)

(II) 第9地点(取付12-1号排水路),
 第10地点 I・II区(12号排水路),
 第11地点(取付11-2号道路)

用排水路・取付道路、及び田面の地下げ施工箇所である。合せて調査
 した。全長約100mあるため I・II区に分けている。I 区では旧河川跡

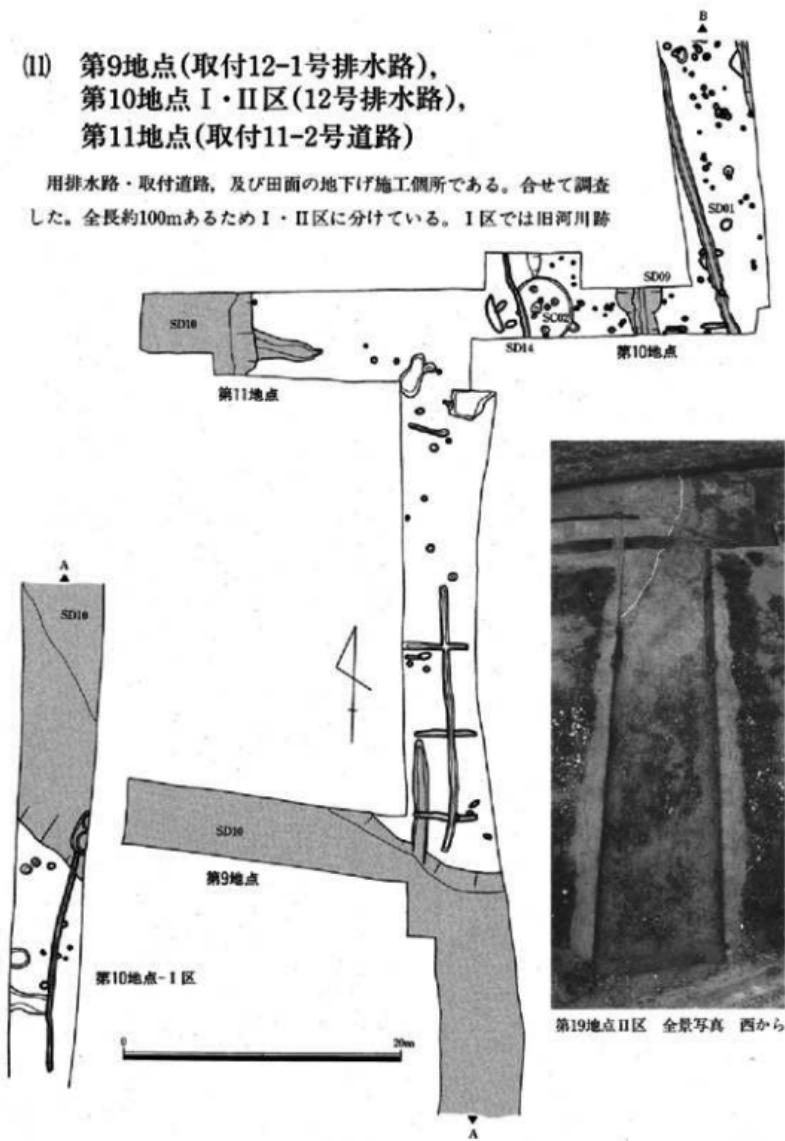


Fig.23 第9地点II区、第10地点I・II区、第11地点造構配置図 (縮尺1/400)

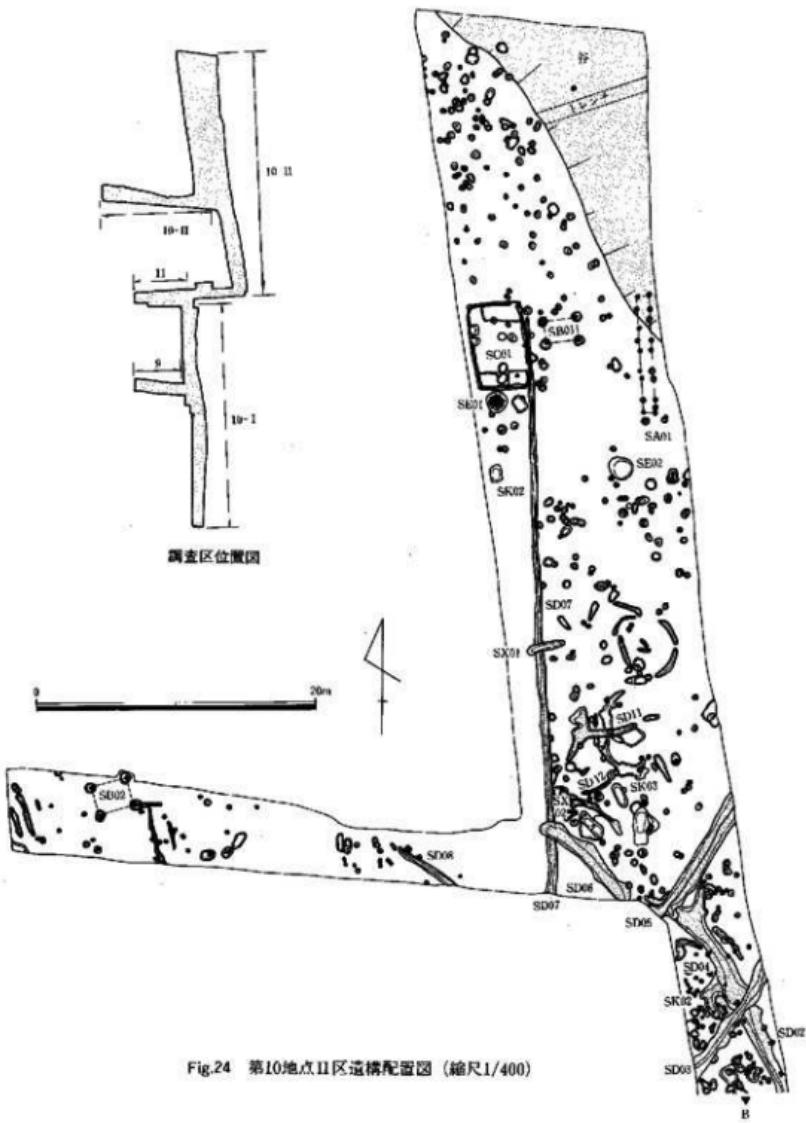


Fig.24 第10地点II区造構配図 (縮尺1/400)

SD10が蛇行して入っており、埋没後の上面では遺構は少ない。

河川跡の東側は黄褐色粘質土、又は砂質土が地山を形成しており、遺構が検出できる。II区もI区同様の遺構面を形成するが、北東側には浅い谷の肩が存在する。遺構は弥生時代前期の竪穴住居跡1、溝状遺構14、掘立柱建物2、中世の井戸2、柵1である。弥生時代前期の住居跡は、平面形が円形を呈し、直径約4.8mを測る。主柱は4本である。炉は楕円形で、中央に位置し、その両端に小Pitが存在する。この小Pitは棟持ち柱の可能性がある。その他、II区のSE02付近においてはPitがサークル状になっている個所があるので、これらも円形住居跡の可能性がある。溝SD10は削平を著しく受けているが、断面形はV字形である。溝SD01は断面形が逆梯形

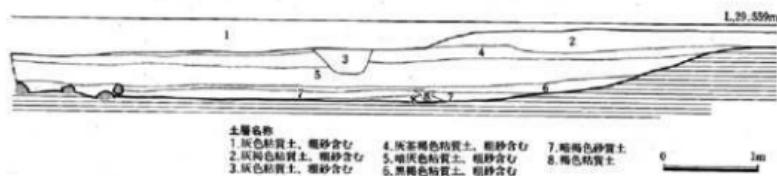
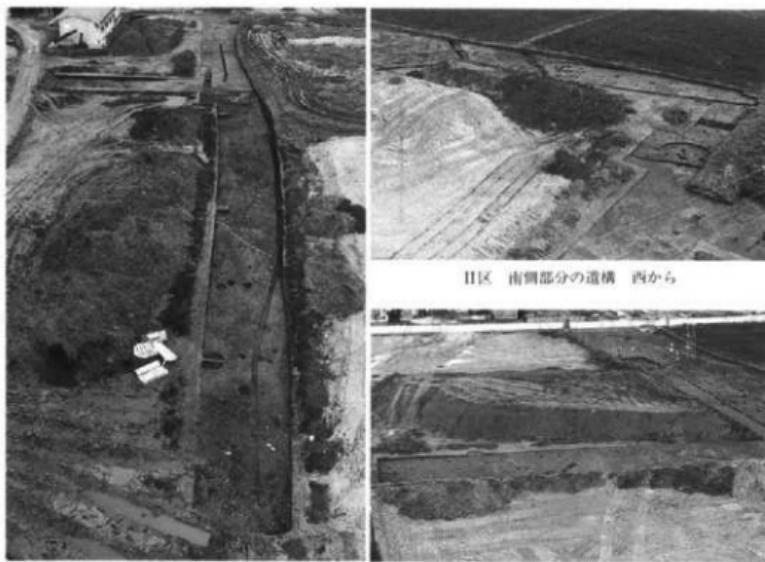


Fig.25 第11地点河川跡SD10土層図（縮尺1/60）





II区 全景 北から



住居跡SC01 東から



住居跡SC02, 墓SD14 南から

を呈し、前期後半に属している。古墳時代の住居跡は平面形が長方形で、長さ6.3m、幅4mを測る。床面の両袖にベッドを付設している。炉は中央東寄りにあるが出入口のPitは不明である。主柱は2本である。土師器は南壁側ベッド中央のPitより鉢・甕・壺・高杯などがまとまって出土した。その他、編物用の繩の鋸りも出土している。掘立柱建物はいずれも1間×1間の規模である。古墳時代住居跡に付属するものであろう。中世の井戸は直径約1.6・1.8m、深さ1.6・1.35mを測る。いずれも素掘りであるが、井戸SE01は底面に人頭～拳大の碟を詰めてい

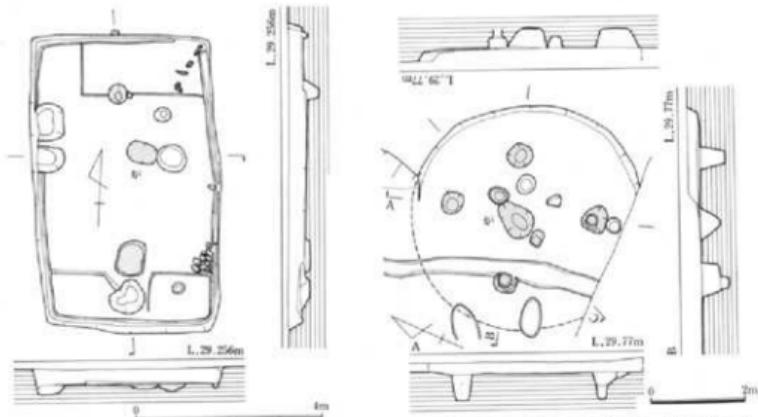


Fig.26 古墳時代住居跡SC01実測図（縮尺1/120）

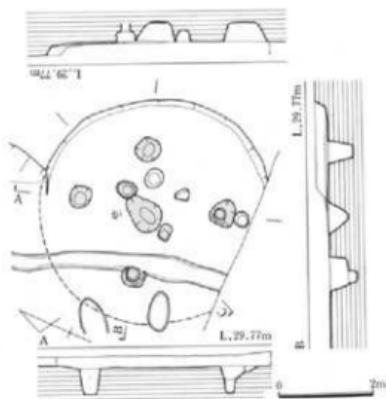
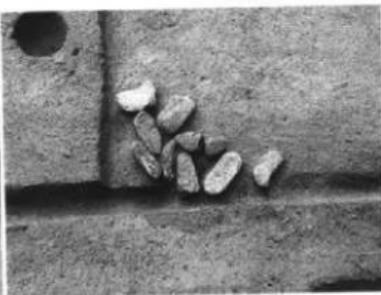


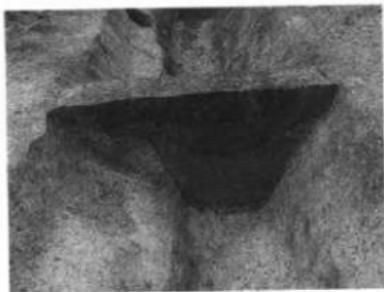
Fig.27 弥生時代住居跡SC02実測図（縮尺1/120）



住居跡 SC01内土器出土状態



住居跡 SC01内遺物出土状態 東から



溝 SD02土層面



溝 SD09土層面

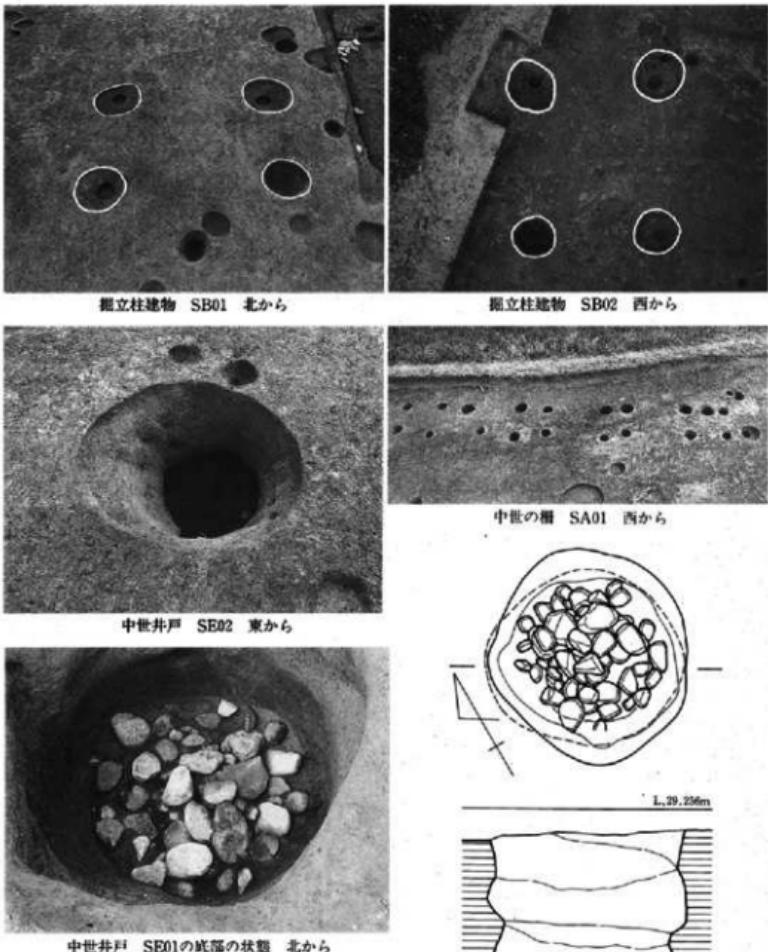
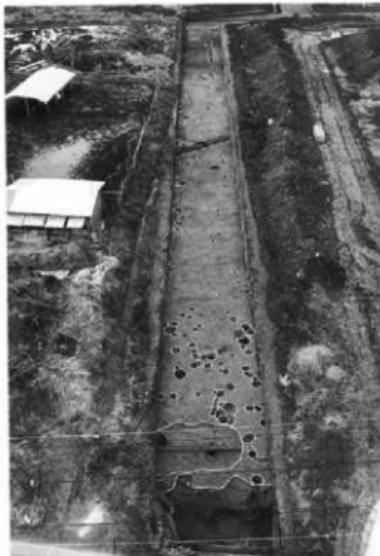


Fig.28 井戸SE01実測図（縮尺1/40）

た。この砾群の上面から土師器杯、龍泉窯系青磁や白磁片が出土した。櫓SA01は径20cmの柱穴が南北方向に2列に並ぶもので、境界地に位置するため、規模は不明である。

(12) 第10地点III～V地点 (12号排水路, 取付12-2号排水路)

用排水路の予定地である。全長約237mと取付排水路の約75mを3ヶ所に分けて調査した。造構面はIII区が黄灰色シルト質土、IV区が黄灰色粘質土、V区は第1面が暗い黄灰色粘質土、第2面が黄褐色粘質土である。III～V区の中間には、幅約40mを測る浅い谷が存在する。造構はIII区が古代末の溝1、弥生時代前期の溝2、土壤2、中世の溝1、IV区は弥生時代前期の溝2、古代末～中世の土壤4、V区の第1面は中世のPit群、第2面は弥生～古墳時代のPit群、及び土壤4が存在する。III・IV区の中間に在る谷は中世には完全に埋没しており、谷底や覆土から突帯文系の繩文土器片が出土する。III区の弥生時代の溝SD02は断面形がY字形を呈するもので、上部は削平を受けている。突帯文系の甕が出土している。古代末～中世の溝SD01の覆土は砂質土及び、砂屑が互層になっており、且つ、版築状に固く締められている。溝としての機能を考えるよりは道路面の版築として把握すべきであろう。東西方向の溝であり、条里方向に合致する。この溝は第8地点SD01や第9地点V区につながる。IV区の溝SD06・07も断面形がY字形を呈するもので、削平のため底部のみが遺存している。幅50～80cm、深さ10・55cmを測る。やはり突帯文系の甕片が出土する。これらの溝は谷を挟んで断続していることから、本来は、環状



第10地点III区 全景 南から



第10地点IV区 全景 北から

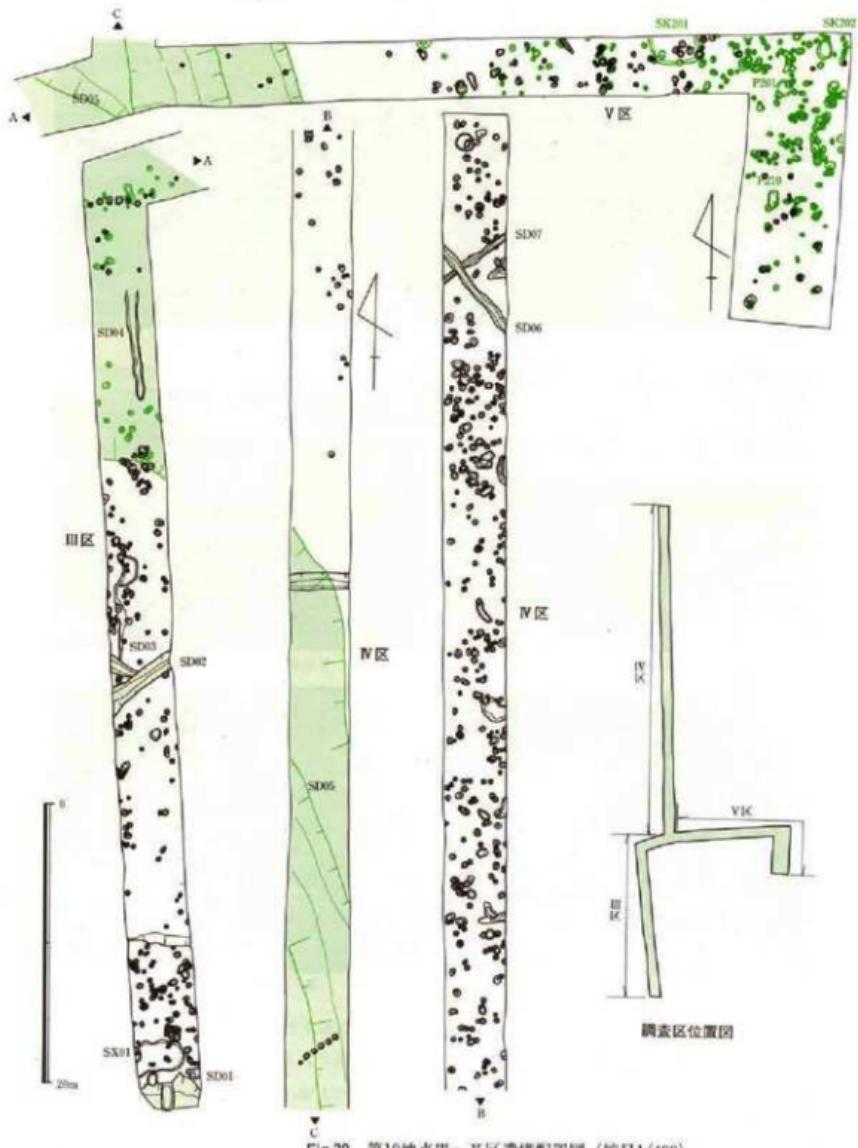


Fig.29 第10地点Ⅲ～Ⅴ区遺構配図 (縮尺1/400)



III-IV区 全景 南から



V区第1面 全景 東から



溝 SD01の土層面 西から



V区第2面 全景 南から



溝 SD01 東から



溝 SD02 東から

を呈しているものではなく、舌状に伸びた低丘陵の丘尾切断を行っているものと考えたい。浅い谷によって区画された単位集団の存在を伺うことが可能である。谷は現存の長さ約60m、深さ1.3mを測り、西南方向に主軸を置いている。V区第2面の土壤は平面形が隅丸長方形又は不整円形を呈し、覆土からは弥生時代の土器片を出土している。



溝 SD06土層面

縄文時代晩期の谷SD05 北東から

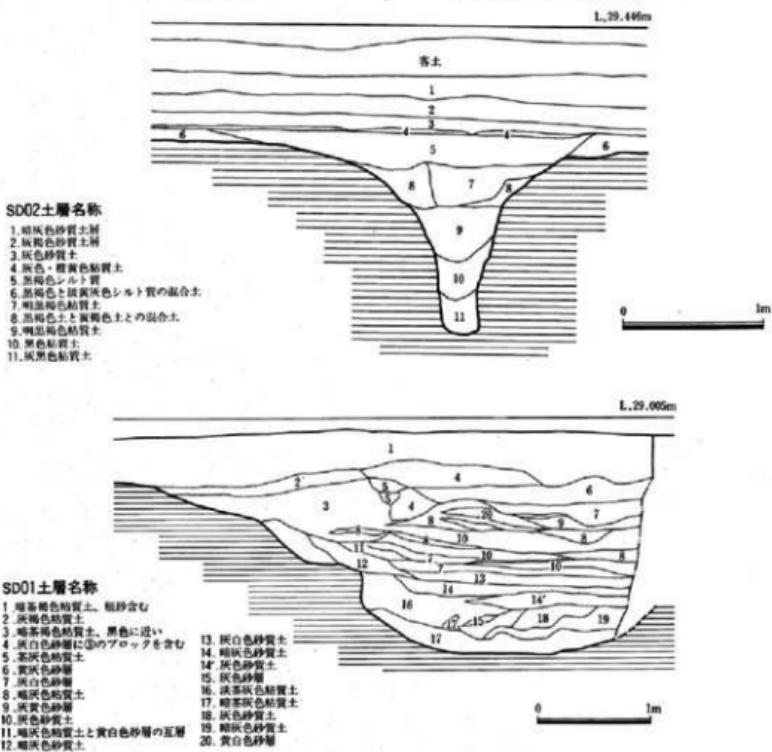


Fig.30 溝SD01-02土層図 (縮尺1/40・1/50)

(13) 第12地点 I ~ IV区 (9号道路)

全長約625mの道路予定地の内、南側約200mは試掘によって河川の氾濫原と判明したため調査から除外した。残り約400mについてはIII~VI区の4ヶ所に分けて調査を実施した。

III区は標高約30.6mを測る。南側は礫を含んだ暗灰黄色の砂質土で、北側は黄褐色の粘質土である。遺構は近世の溝状造構3、土壤6、古代末~中世の条里造構1、古墳時代竪穴住居跡7、弥生時代竪穴住居跡1、掘立柱建物1、河川跡1がある。III区の近世の溝は水路の名残りと考えられる。土壤等から多くの伊万里が出土しており、水路沿いに宅地が存在したのであろう。現代用水路と一部重複している。弥生時代の遺構は住居跡1軒、掘立柱建物1棟のみであったが、住居跡の平面形は円形と考えられ、一部を確認するにとどまった。東側約20mに位置する第13地点では円形住居跡の他、甕棺などを検出した。同一集落を構成するものであろう。時期は前期~中期である。掘立柱建物は梁行2間のみを検出した。古墳時代の住居跡は平面形が長方形又は、隅丸方形を呈している。住居跡SC04は平面形が隅丸方形を呈し、一辺の長さ4.4~4.6mを測る。床面の四隅にPitを有しているが、浅いため主柱になり得るか疑問である。炉は中央



第12地点III区 a地点1 全景 北から



溝 SD01 北から



溝 SD02-03の土層面 北から

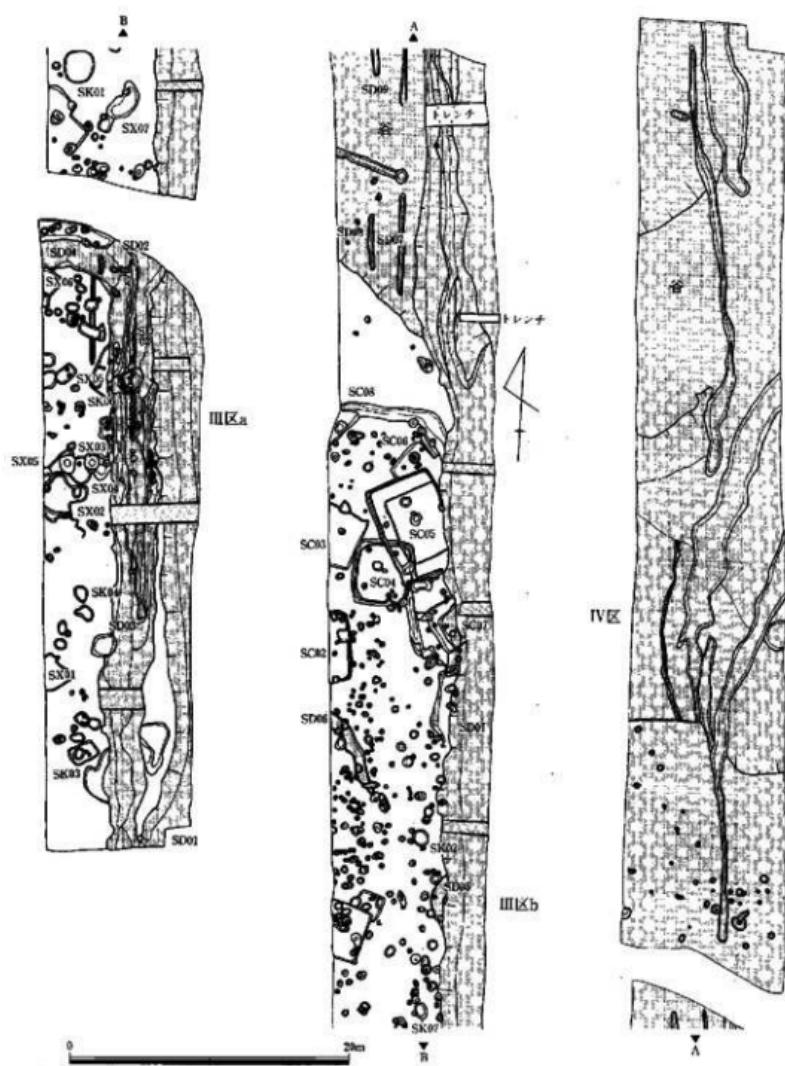


Fig.3: 第12地点III・IV区遺構配図 (縮尺1/400)

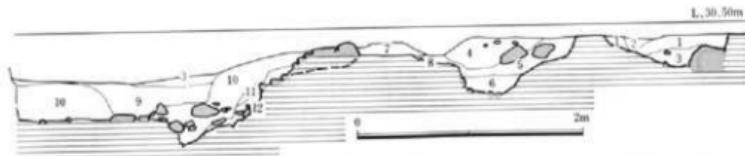
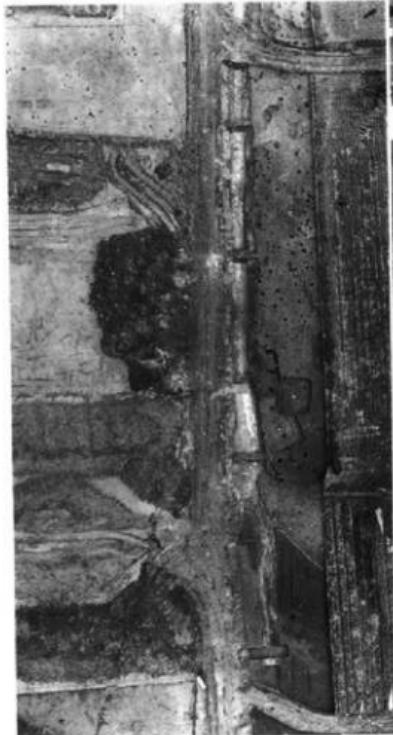


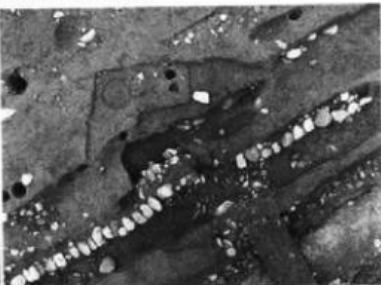
Fig.32 溝SD01-02-03土層図 (縮尺1/50)

土層名稱

- 1. 黒灰褐色土
- 2. 順灰色砂質土
- 3. 黑色砂質土
- 4. 黑褐色土に黄褐色土が混入
- 5. 黄色をおびた黒褐色粘質土
- 6. 黄色をおびた黄褐色シルト質土
- 7. 黄褐色粘質土
- 8. 黄褐色シルト質土
- 9. 黄褐色シルト質に黄色砂が混入
- 10. 黑褐色シルト質土
- 11. 黑褐色土と灰褐色土の混合土
- 12. 黑褐色砂砾土



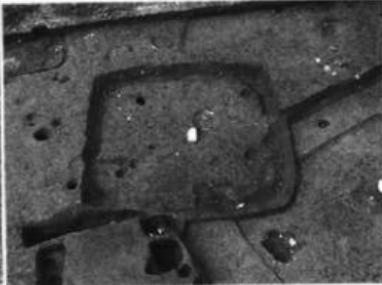
III区b地点 全景



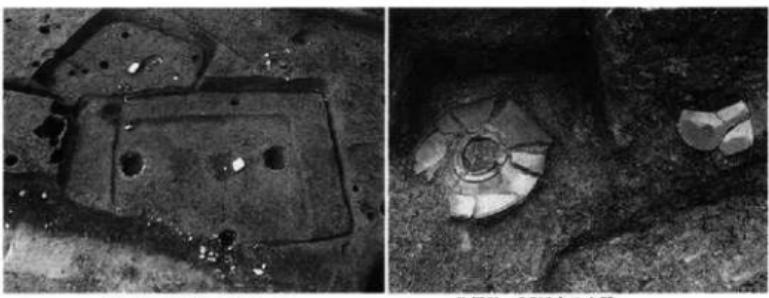
古墳時代住居跡 南東から



III区b地点 住居跡群 北から



住居跡 SC04 東から



住居跡 SC05 東から

住居跡 SC02内の土器



III区b 溝SD01の土層 北から

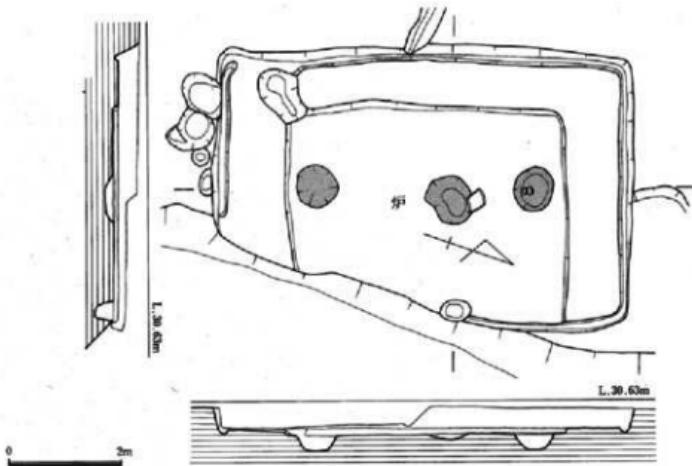


Fig.33 住居跡SC05実測図 (縮尺1/100)



弥生時代の掘立柱建物 SB01 東から

にある。SC05は平面形が長方形を呈するが、床面の3面に造り出しのベッドを有している。住居跡の規模は長さ7.6m、幅5.04m、ベッドの幅約100cmを測る。炉は床面中央にある。住居跡の時期は4世紀後半～5世紀前半と考えられる。河川跡はIII区の北側からIV区に至っているが、河川跡ととらえるよりは谷とみるべきであろう。幅約90mを測り、深さは約2mである。緩やかな勾配をもっている。条里遺構の大部分は既設の道路下になってしまっており、西側の一部を検出したにとどまる。上部には現代の水路が一部重複している。断面形は逆梯形を呈しており、推定幅約4m、現存の深さ約60cmを測る。長さは約173mに亘って断続的に検出した。III区北側とIV区は削平による遺存状態が悪く痕跡をとどめているに過ぎない。この条里遺構は現状では水路状を呈しており、覆土、又は床面に砂層の堆積が認められる。但し、III区の南側では溝SD01の床面に砂礫が填圧されており、床面の両側に幅30cm、深さ約30cmを測る溝状のものが存在する。道路の側溝と見做すことも可能である。覆土から青磁、白磁、石鍋等が出土した。Fig.33の断面ではV字形の底に砂礫を充填して固め、底部を形成していることが解る。填圧の砂礫層からは中国の白磁碗が出土するが、青磁は出土しない。

IV区は谷地形内に入ってしまう。上面には条里遺構が遺存しているが、痕跡のみで方向を知るにとどまった。谷の覆土は黒褐色粘質土を主体としており、基底部は礫層となっている。この谷は、西北方向に主軸をもっており、第3地点IV区、第14地点の南西側でも確認している。古墳時代初頭の土器が多く出土している。



IV区第2面の遺構全景 南から

(14) 第12地点 V・VI区 (9号道路)

標高は27.70~28.50mを測る。遺構面は暗い黄灰色粘質土であるが、VI区の第1面は暗灰色粘質土、第2面は黄灰色粘質土である。V区の南半はIV区につづく谷の肩に相当する。ここでは条里遺構が、谷の覆土の上面に存在している。V区で検出した遺構には鎌倉時代の土塙墓1、木棺墓1、土塙5、井戸2、条里関連の溝2、溝状遺構3がある。木棺墓のSX02は墓壇の平面形が隅丸長方形を呈し、長さ156cm、幅80cmを測る。内側は2段になっており、木棺の内法は幅62cmを測る。底面の四隅に木棺の痕跡を留めているが、釘が出土していないので、組合せと考えられる。北東側に青磁鏡蓮弁文碗、青磁皿、白磁皿、土師器皿があり、北側には漆箱と鉄製刀子が副葬されている。漆箱は木質が腐食しているため潰れてしまっている。表面にわずかに文様が認められる。土塙墓SX01は主軸を東西方向に置き、墓壇の平面形は隅丸長方形である。長さ175cm、幅100cmを測る。削平のため深さは10cmを測る。副葬品は東側の壁付近に糸切り底の土師器皿・杯、鉄製刀子、砥石がある。井戸SE01は直径170cm、深さ118cmを測る。石組井戸である。SE02は素掘井戸である。条里遺構は主軸を磁北からN 2°30'Wに振っている。VI区



第12地点V区 全景



中世の墓 SX01 南から



中世墓 SX02 西から

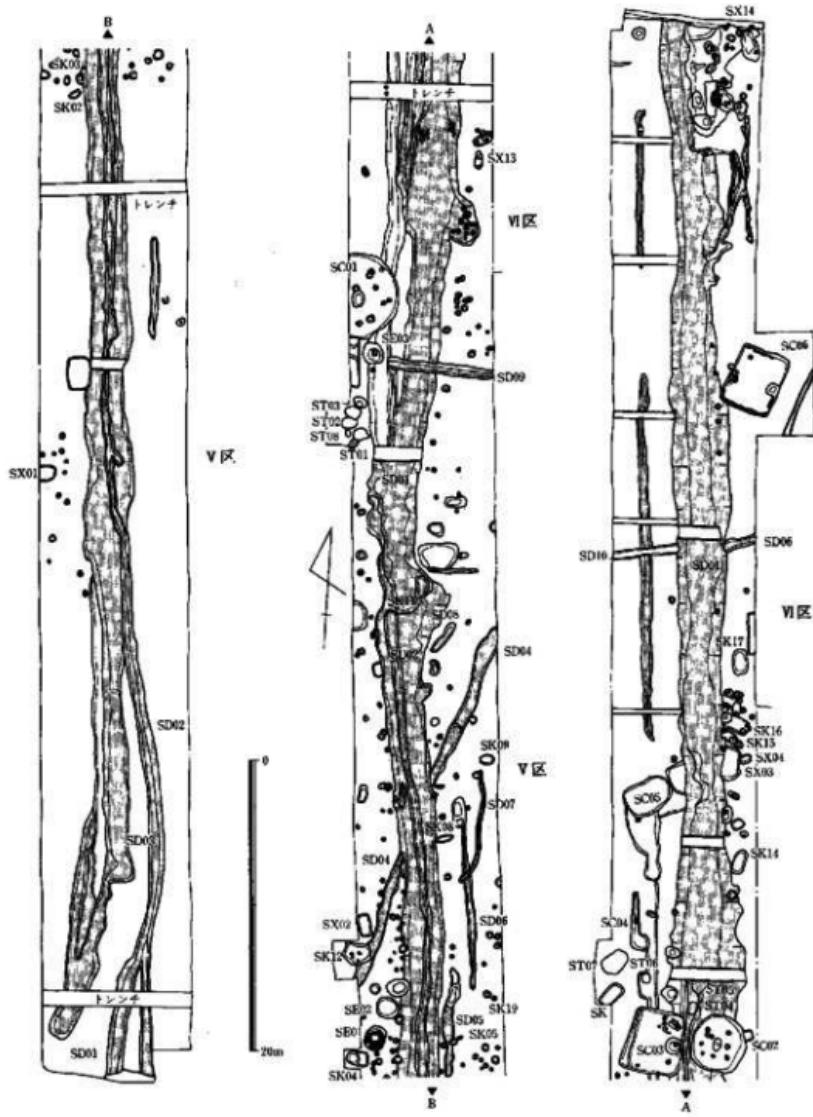


Fig.34 第12地点V・VI第1・2面造構配置図 (縮尺1/400)



土壤基SX02出土の漆器と刀子

井戸 SE01 南から

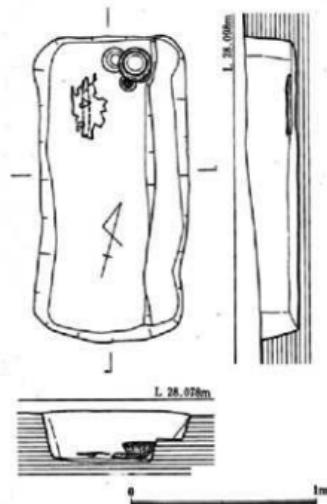


Fig.35 土壌基SX02実測図（縮尺1/30）

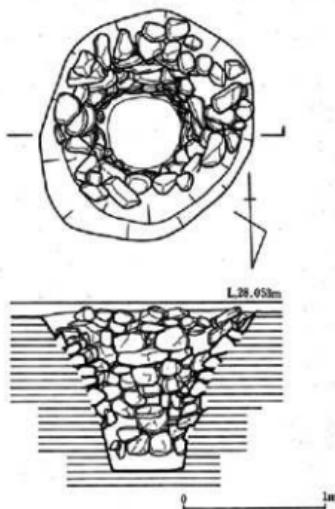


Fig.36 井戸SE01実測図（縮尺1/40）

の南端では西方向に分岐している溝がつづき、これは東西方向の条里線を示すものであろう。南北方向はVI区まで若干蛇行しながらつづいている。幅約2～4m、深さ50cmを測る。断面形は逆梯形を呈している。溝の底面はV字形に掘削され、その下部に拳大の礫と砂を充填して固め、溝の底面を平坦に仕上げている。V区では溝上面が削平され既にこの填圧の砂礫部分が表出している。トレンチの土層観察では底面の両側に側溝が設けられていることが判明した。砂礫中の遺物は白磁を中心として青磁は出土しない。VI区は遺構面が2面存在する。この部分は浅い谷で、2～3回に亘って整地層を形成している。第1面は中世の生活面である。第2面では弥

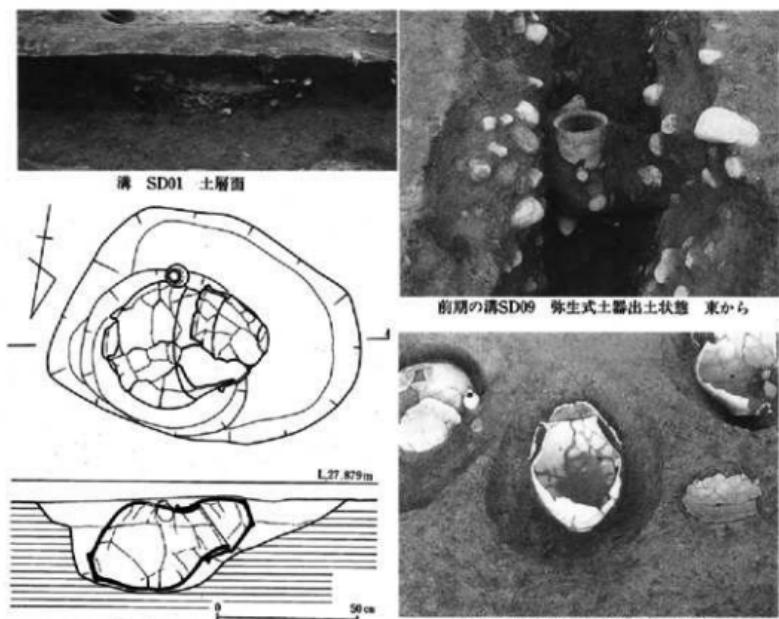
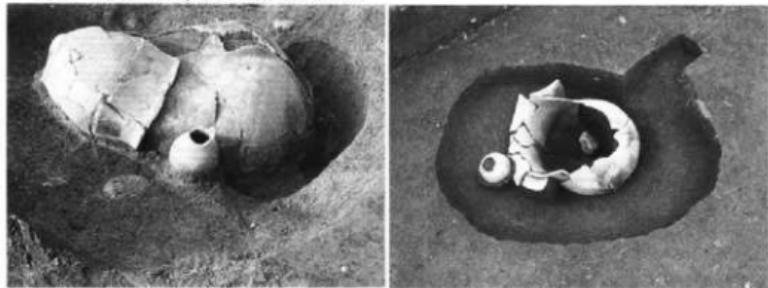


Fig.37 前期甕棺墓ST03実測図（縮尺1/20）

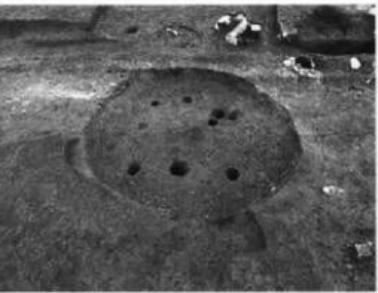


甕棺墓ST03と副葬の壺 南から

生時代前期の甕棺墓 8、土壙墓 4、溝 1、住居跡 4、古墳時代竪穴住居跡（工房跡）3、中世の井戸 1、不定形土壙 1、条里遺構である。甕棺墓は小形棺で、削平を受けているが、いずれも合せ口と考えられる。ST03には小壺が副葬されている。下壺はいずれも壺形土器で、口縁部は如意形を呈する。ST03の上壺は突帯文系の鉢である。これらは板付 I 式行期に属するものである。住居跡は円形を呈し、SC01は直径約 6 m、SC02は極めて小形で、直径 3.8 m を測る。主柱



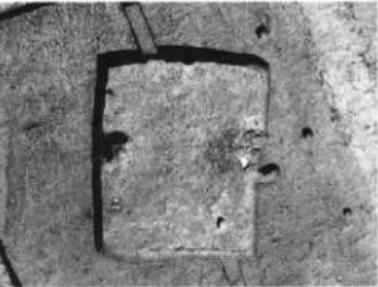
弥生時代の住居跡SC01 東から



弥生時代の住居跡 SC02 東から



古墳時代の玉作り工房 SC03 東から

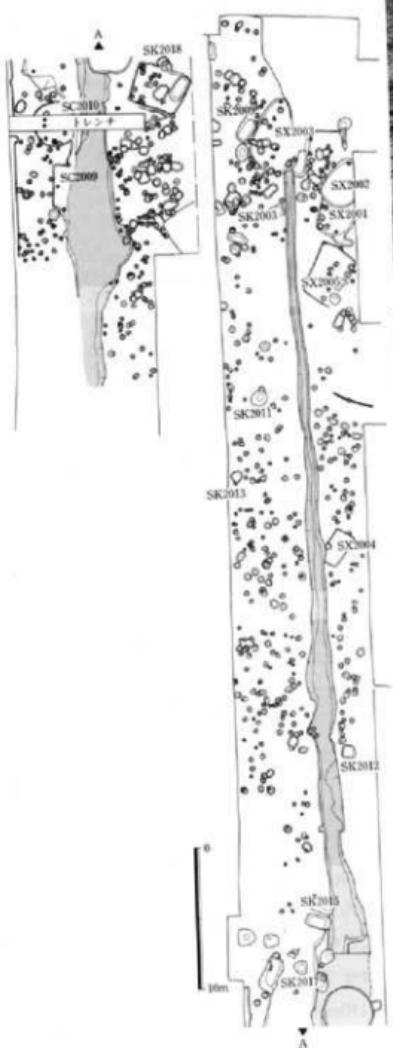


古墳時代の工房跡 SC06 北から



第12地点VI区 第2面全景 航空写真

は6本である。古墳時代住居跡は隅丸長方形を呈するが、SC05は削平のため規模不明。SC03は北隅にカマドを有している。SC06は西壁にカマドらしき焼土を含む粘土がある。いずれも床面に滑石細片や粉末層が散布しており、玉の未成品は合せて約500個を数える。完成品には玉の他、勾玉や有孔円盤がある。中世の井戸SE03は直径約140cmを測り、内部は石組が崩壊した状態をとどめていた。底部の内法は直径約30cmである。第3画の造構面には大・小の土壙がある。平面形は隅丸長方形又は模円形を呈し、長さは2.0~5.0mを測る。いずれも弥生時代中期の造構



第12地点VII区 第3面全景 北から



VII区 第3面南半の遺構 北から



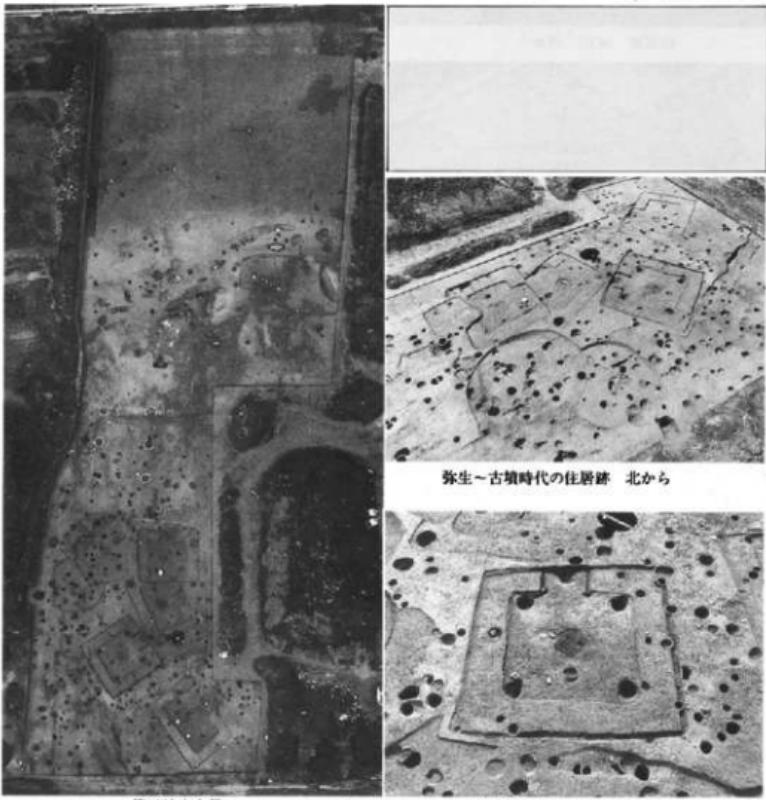
VII区 第3面 土壌SX2002 北から

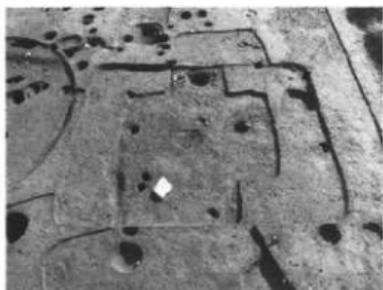
である。

Fig. 38 第12地点VII区第3面遺構配置図 (縮尺1/400)

(15) 第13地点 (45-1・2田)

第11地点Ⅲ区の東側に位置している。標高は30.6~30.7mを測る。黄褐色粘質土を地山とするが、部分的に砂礫層が表出している。この黄褐色粘質土は東側に傾斜しているので、調査区東側は、浅い谷地形を形成しているものと考えられる。谷上部には厚さ30cmを測る灰黒色粘質土が堆積している。2本のトレンチによって谷の傾斜面に弥生時代の遺構が存在していることは明らかなので、谷の埋没はそれ以後のことと考えられる。弥生時代の地形環境を現わしている。灰黒色粘質土の上面に中世の遺構が検出できる。よって、調査区の西側は1面、東側では2面





住居跡 SC03 西から



住居跡 SC07 北から

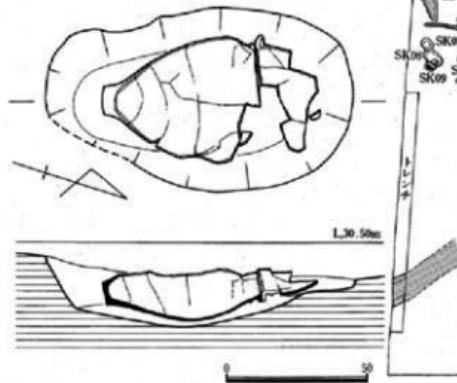


Fig.39 墓塚ST01実測図 (縮尺1/20)

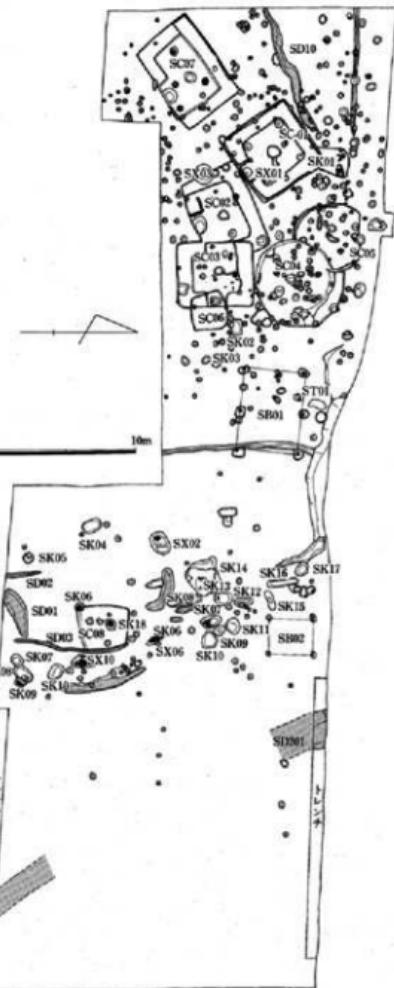


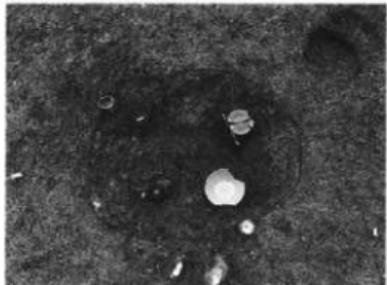
Fig.40 第13地点遺構配置図 (縮尺1/400)



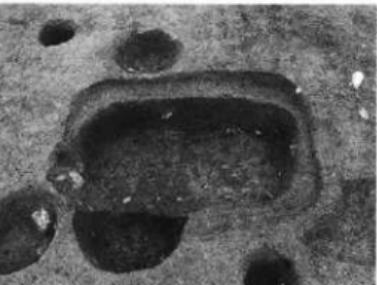
弥生時代斎棺墓 ST01 南から



掘立柱建物 SB01 北から



古代の土壙墓 SX01 東から



弥生時代の土壤 SK02 南から



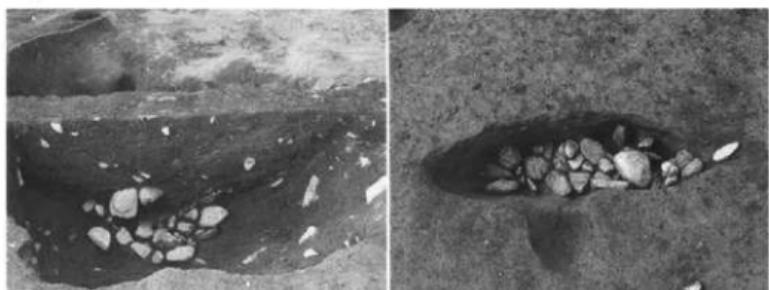
第2面の弥生時代の溝 SD201 南から



中世の土壤 SK06 東から

の文化層を発掘した。

第1面の遺構には弥生時代住居跡2、掘立柱建物1、斎棺墓1、土壤1、古墳時代住居跡5、土壤2、古代末から中世前半期の遺構には、土壤墓1、土壤18、掘立柱建物1、溝4がある。東側の第2面は調査区の南側と北側に沿って2本のトレンチを設定するにとどめたが、遺構は



中世の土壤 SK13土層面 北から

中世の土壤 SX06 東から

弥生時代中期の溝1を検出した。弥生時代の住居跡は平面形が円形を呈し、直径5.2~6.0mを測る。SC04は北側にベッド状に段を有しているが、これは切合関係を示すものである。いずれも主柱は4本で、炉は中央にある。掘立柱建物は1間×2間の規模で、柱穴からは中期の土器が出土した。斐棺墓は合せ口の小児棺である。第2面の弥生時代中期の溝は幅約3m、深さ約60cmを測り、断面形は逆梯形を呈している。谷の主軸に沿っており、排水施設又は、区画的意味合いをもつものであろう。

古墳時代の住居跡は平面形が長方形、又は方形を呈し、長さは5.6~6.8mの規模である。いずれも周壁にベッドを有している。主柱は2本と4本である。炉跡は床面の中央に、出入口のPitは1辺の中央に設けている。いずれも時期は4世紀代である。古代末の土壙墓は住居跡SC01の炉跡部分と重複しており、調査の不手際から墓壙を破損した。墓壙内部から八稜鏡2面、銅鈴2個、鉄製毛抜き1、越州窯系青磁碗1、土師器杯1が出土した。八稜鏡の1面は開田の際に大部分が損失している。中世の土壤の多くは東側の谷地斜面に偏在しており、平面形が不定形なものが多く、SK06-10などのように底面、又は内部に人頭大から拳大の礫を投棄しているものがある。更に、谷の主軸に沿っている溝状造構の存在と関連することも考えられ、両者を合せて、ヌルメの構造を示すものと考えられる。東側に中世水田が存在したのであろう。

(16) 第14地点 (45-3・4田)

第12地点IV区の東側、第3地点IV区の西側に接している。遺構面は2面存在する。第1面の遺構面は黒灰色砂質土、又は暗灰黄色粘質土で、礫を含んでいる。全体の約 $\frac{1}{2}$ には疊層が表出している。第2面は黄灰色粘質土であるが、疊層の下には存在せず、疊層の間の調査区中央部分に谷状に存在する。第2面の西南部分には大きく浅い谷が存在する。谷上面は第1面である。

第1面の遺構には古墳時代～中世までの遺構で、住居跡1、方形周溝状遺構1、土壙墓2、溝4、掘立柱建物3、焼土壙1、土壙2、谷がある。第2面は調査の対象から除外したが、Pit群がある。古墳時代の谷の調査はトレーナーのみで終了したが、現存の深さ約60mを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体としており、底面は砂疊層である。遺物は4～5世紀の土器が出土した。方形周溝状遺構SD01は、一辺の長さが約17.8cmを測り、略方形を呈する。溝の幅は80～100cm、深さ25cmを測る。断面形はV字形を呈する。方形周溝の内側には建物等の構造物は存在しない。主軸は磁北方向にある。掘立柱建物SB01は梁行3間×桁行6間の規模で、梁行は4.6m、桁行は9mを測る。SB02は2間×3間の規模である。SB01の主軸方は略北に、SB02の主軸方向は西北方向である。覆土はいずれも黒色粘質土又は砂質土である。掘立柱建物SB03は、2間×3間



第14地点全景 航空写真

の規模をもち、主軸をやや東へ振っている。覆土は灰黄色粘質土である。住居跡は平面形が方形を呈し、一辺の長さ約3.5mを測る。主柱及び炉は不明である。遺物には5世紀代の土師器が出土した。古代の遺構には土塙墓がある。平面形が隅丸長方形を呈し、長さ約2.8m、深さ約66cmを測る。断面形は舟底形を呈しており、底面には土師器碗及び皿が副葬されていた。土塙

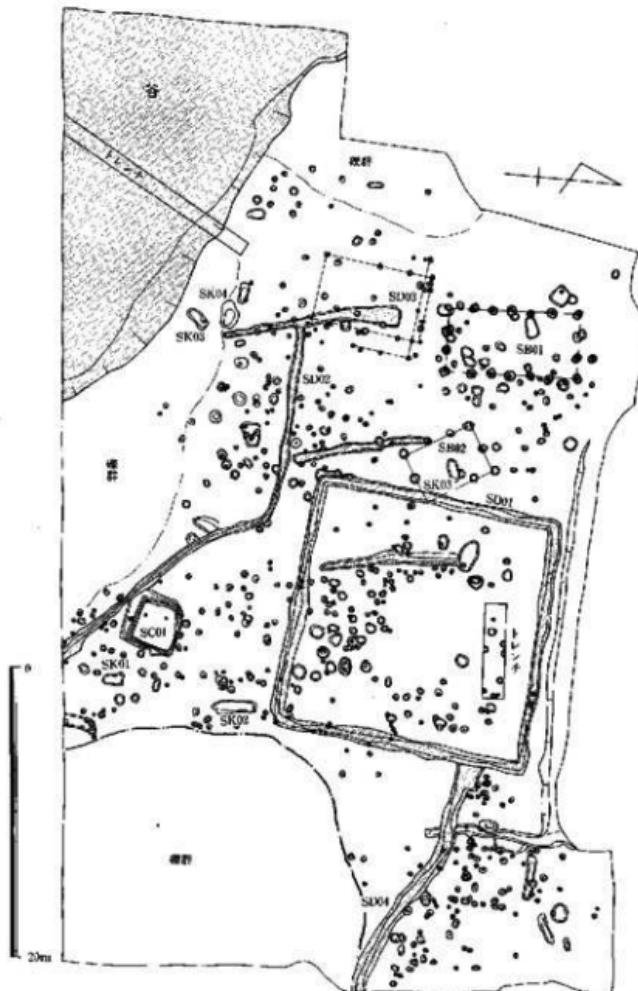
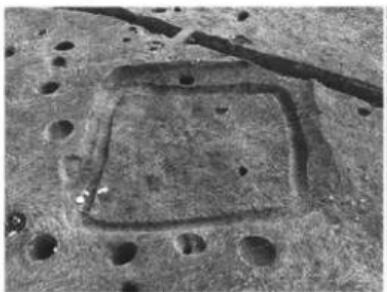
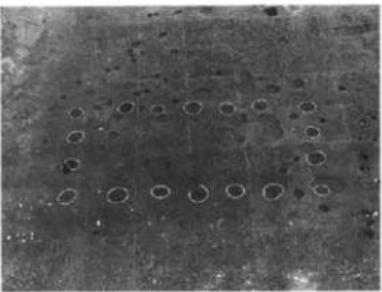


Fig.41 第14地点遺構配図 (縮尺1/400)



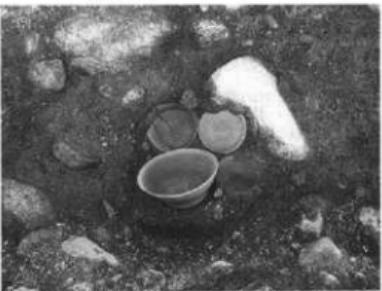
古墳時代住居路 SC01 東から



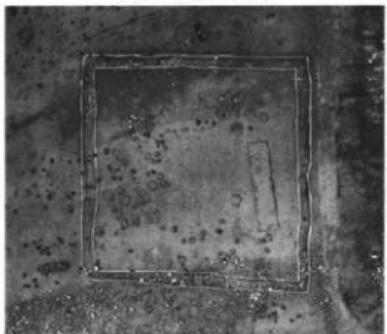
掲立柱建物 SB01 西から



古代の土壙墓 SK02



土壙墓 SK02副葬の土師器



方形区画溝 SD01



方形区画溝 SD01の土層面

SK03・04は中世の土壙墓と考えられるが、副葬品等は無い。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.6~1.8mを測る。焼土壙SK01は平面形が隅丸長方形を呈し、壁はやや袋状を呈し、周壁が良く焼けている。長さ1.4m、幅0.7m、深さ30cmを測る。底部は平坦である。

(II) 第15地点 (46-3・4田)

第12地点VI区の東側に接している。標高約27.6mを測る。遺構面は灰褐色粘質土又は、黒灰色砂質土で、いずれも拳大の礫が多く含まれている。調査対象地はFig.5のメッシュをかけた部分であったが耕作土(表土)の除去中に甕棺墓等が陥没し始めたため、遺構の分布を知るため、調査範囲を拡張した。本調査はメッシュ部分に限り行い、その他の地域は遺構確認調査にとどめた。しかし、陥没した甕棺墓や表出した甕棺墓は施工の際に破壊される恐れがあるため、極力記録を行い、取り揚げた。検出した遺構は弥生時代の甕棺墓98基、木棺墓1、土塙墓11、祭祀遺構1、古墳時代住居跡2である。又、調査区の東側は旧河川跡SD01が存在する。この河川跡は第3地点VII区につづく川で、VII区では弥生時代中期の土器窪りSX01が川岸に存在した。甕棺墓は弥生時代中期初頭に始まり中期中頃～後半を主体とし、一部は後期前半まで存在するが、後期は非常に少ない。前期の甕棺墓は近接する第12地点V・VI区で出土しているが、前期前半の墓域と、後半の墓域、そして中期の墓域が各々に異にしていることが理解できる。中期の甕棺墓は前代に比べて、墓壙を接しており、切り合い関係にあると共に、棺が重層的に存在する



第15地点全景 航空写真

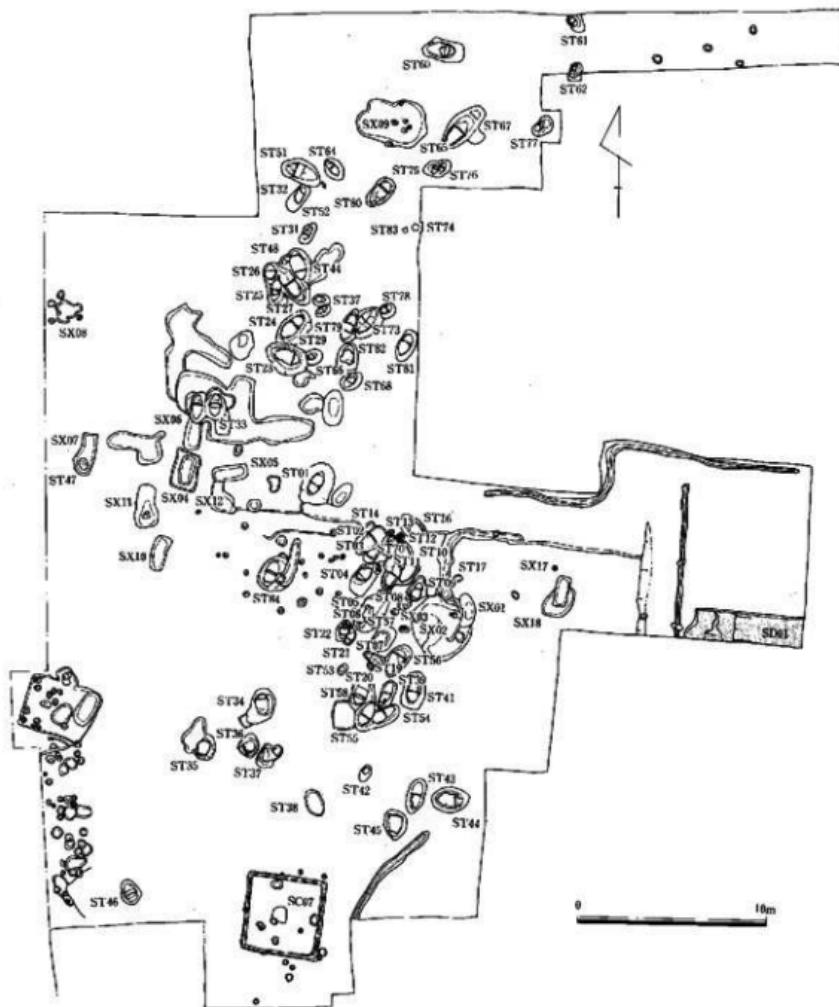
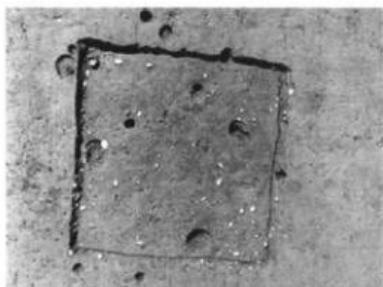
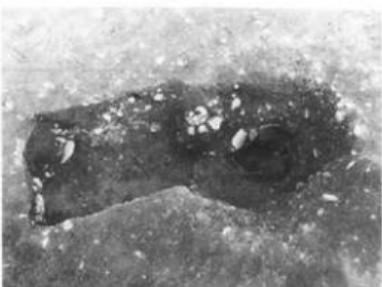


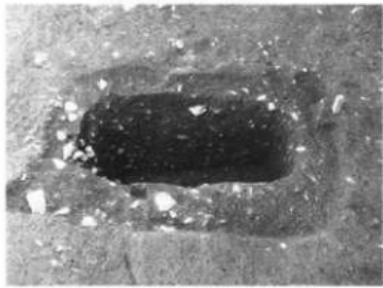
Fig.42 第15地点遺構配置図 (縮尺1/300)



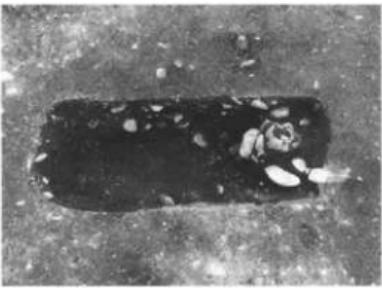
古墳時代工房跡 SC07



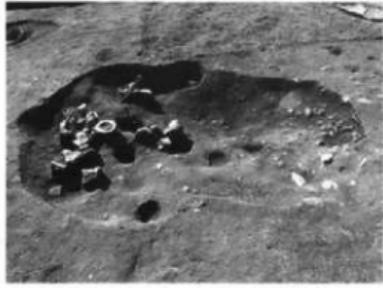
土壙墓 SX07 南から



弥生時代の土壙墓 SX04 西から



土壙墓 SX05 南から

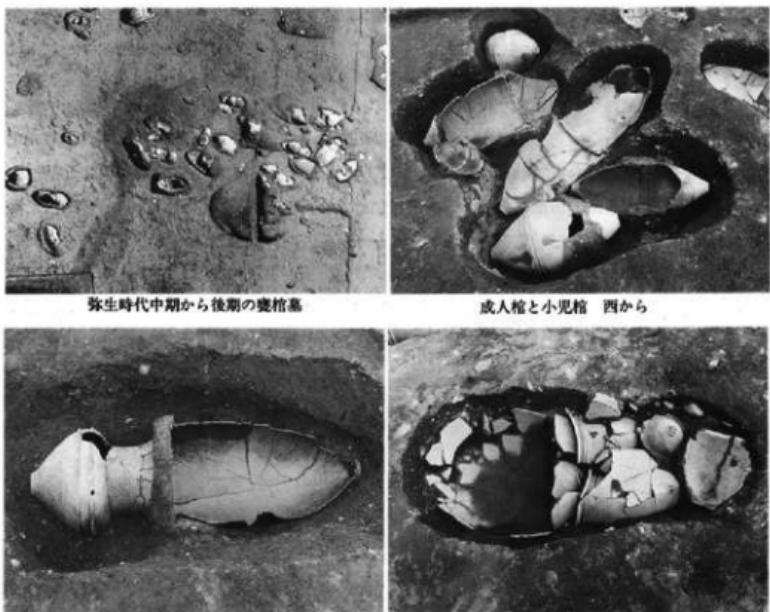


喪棺墓群の中の祭祀造構 SX09 北から



SX09内の祭祀土器

場合も見受けられる。これらにはグルーピングが可能であり、血縁的結合関係にある墓と見做したい。又、墓域が東西約35m、南北約60mに限られているところから共同体全体の共同墓地と考えるより、共同体内の小単位集団の墓地と考えたい。木棺墓、又は木壙墓には壺形土器を副葬しており、これらは前期後半に属している。祭祀造構は平面形が不整隔丸長方形で、断面形



弥生時代中期から後期の甕棺墓

成人棺と小児棺 西から

成人棺 ST85 東から

弥生時代後期の成人棺ST39と小児棺ST40

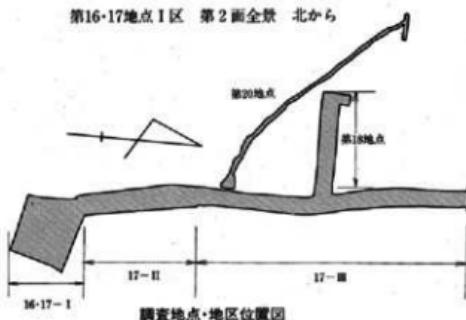
は舟底状である。土壌の内部から朱塗りの高杯・壺・杯・器台等が出土した。古墳時代の住居跡SC07は玉作り工房跡と考えられ、平面形が方形を呈している。例外なく主柱は不明で、工作用のPitや水溜め用のPitが存在する。床面は滑石の粉末・屑が厚く堆積している他、未成品が出土する。これによって、この周辺においては4ヶ所の工房跡を把握できた。いずれも5世紀の中～後半と考えられ、第2次調査では5世紀前半と6世紀前半の工房跡を検出しているところから、この重畠遺跡一帯が早良平野に於ける玉作り生産地として専業集団が存在した可能性を充分にもっている。いずれも玉の種類が限られ、僅かに勾玉や有孔円盤が含まれるだけで、主体はガラス小玉を模倣した小形の白玉である。将来的には古墳等の副葬品の調査によって、供給範囲を特定できる可能性を含んでいる。

(18) 第16・17地点 I ~ III区(62-1田面, 14号道路),
第18地点(59-4田面)

全長約207mの道路予定地と地下げ施工が行われる田面の調査である。いずれも調査区が接しているため合せて述べる。これらの地区は I ~ III区に分けたが、試掘調査では 2 ~ 3 面の文化層が予想された。第1面の遺構面は黄灰色砂質土、又は黄灰色粘質土である。標高は28.3~29.7mを測る。I 区は道路と田面部分である。遺構面は 2 面存在した。第1面は中近世の溝、土壤等である。溝は幅50~80cm、深さ10~20cmを測る。主軸方向は北東方向のものと、北西方向のものがある。土壤等からは青磁、白磁、土器器皿等が出土。第III~IV区は略北方向の溝状遺構である。幅60~100m、深さ15~30mの溝が断続的につづいており、その数は 2 ~ 6 条である。用排水路の変遷状況と見做すことも可能であるが、I 区ではこの条線状の溝は消去し、幅2.5m



第16-17地点 I 区 第2面全景 北から



調査地点・地区位置図

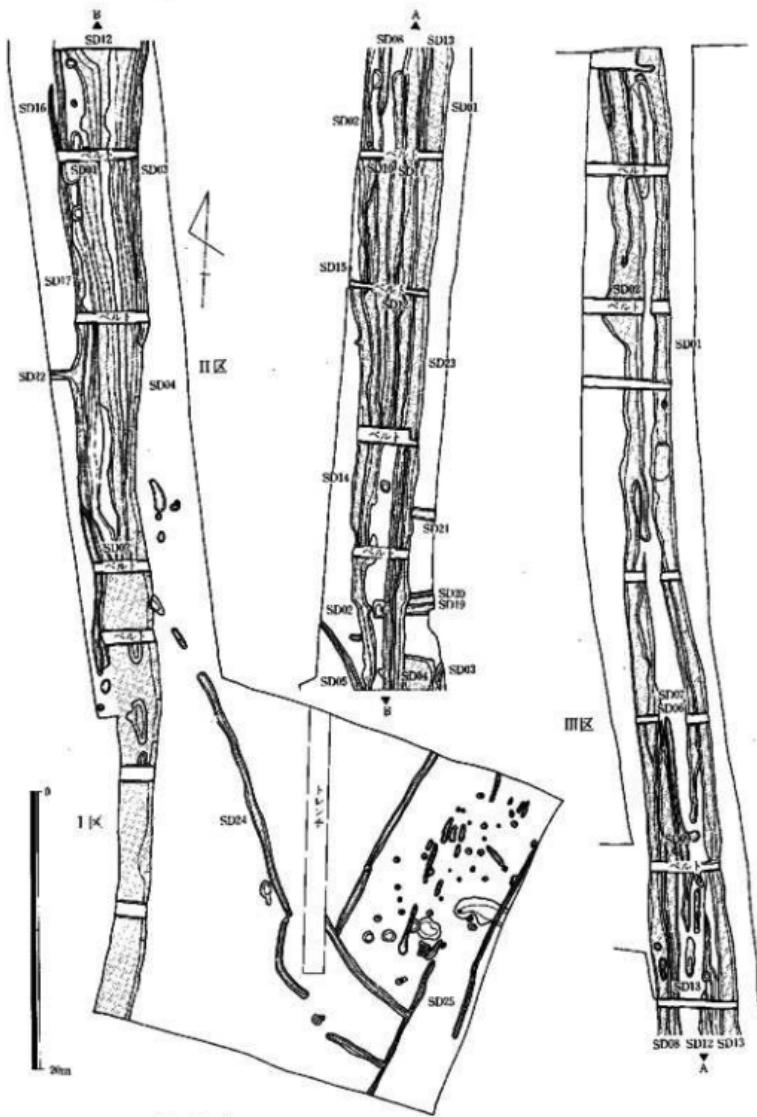


Fig.43 第16・17地点第1面造構配図 (縮尺1/400)

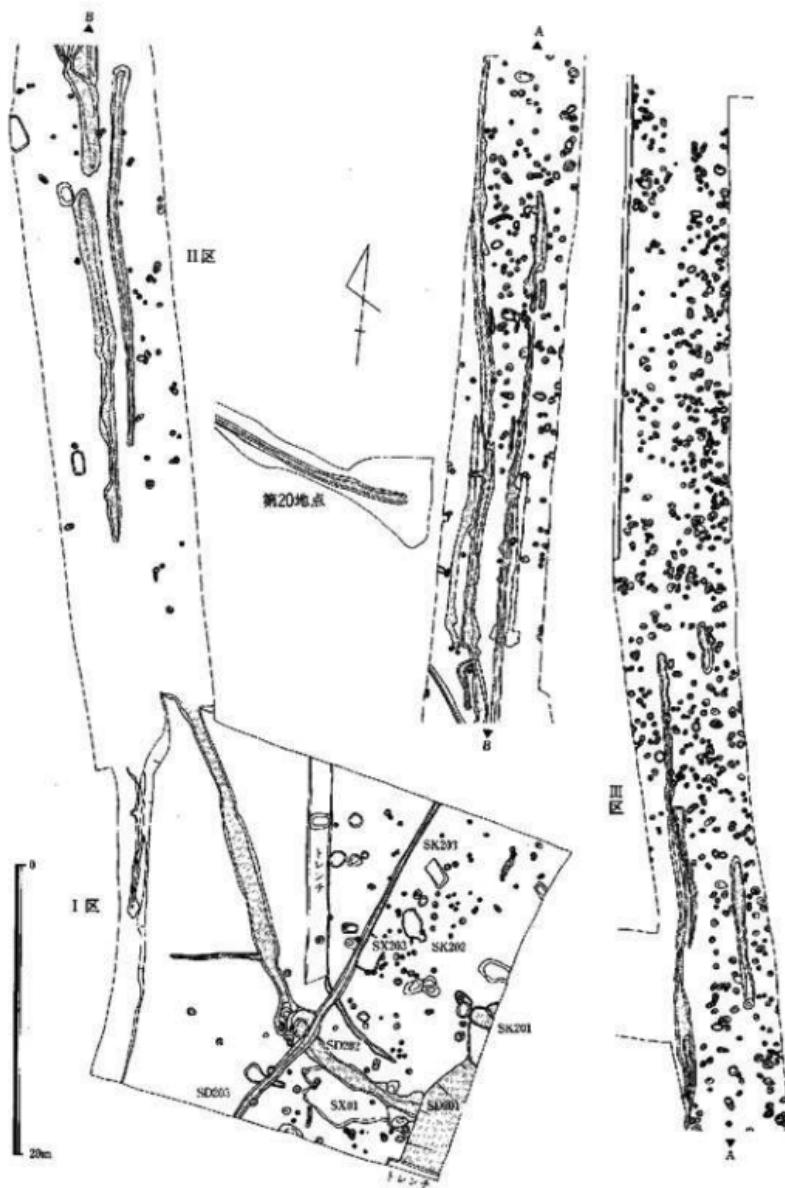


Fig.44 第16・17地点第2面遺構配図 (縮尺1/400)



第16-17地点 I区 第2面全景 北から



I区第2面 溝SD201内の小型丸底壺



溝 SD201の土層面

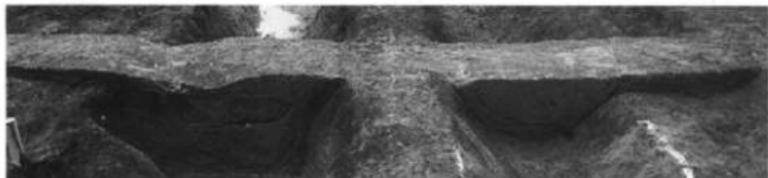
以上、深さ15cmを測る溝に集合してしまう。この溝の断面形は逆梯形を呈している。溝の主軸が略北方向であるので、条里遺構と考えたい。条線状の溝は中世後半期から近世前半期であろう。第2面の遺構はI区が黄褐色又は黄灰色砂質土、II・III区が黄褐色粘質土である。I区の標高約31.20m、II・III区の標高約29.90mを測る。I区では弥生時代前期の溝1、古墳時代の溝1、土壤3、河川跡1を検出した。弥生時代の溝は本来、断面形がY字形をなすものと考えられ、現存幅約60cmを測る。周辺では板付I式併行期の壺形土器が出土している。古墳時代の溝は幅0.8~1.5m、深さ30mを測る。断面形は逆梯形状を呈し、内部は厚い粗砂層とシルト状の粘



第17地点II・III区 第1面全景 北から



II・III区 第2面全景 北から



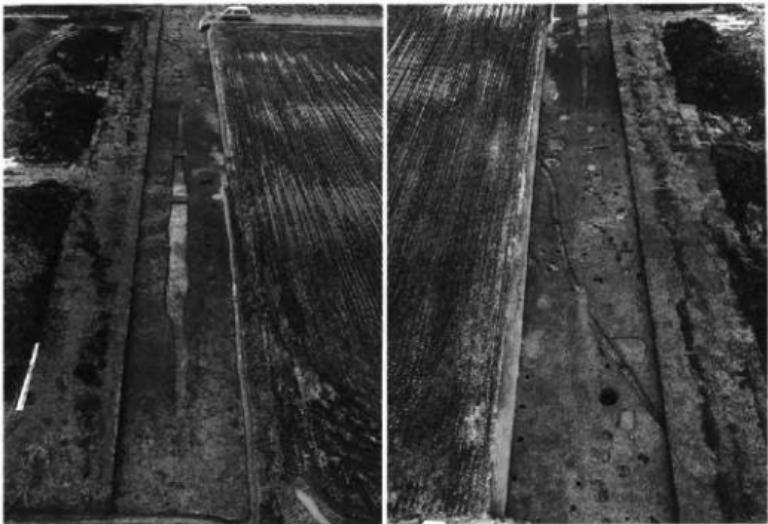
II・III区第1面 溝SD01-02土層断面

質土が互層となっている。溝内には祭祀が行なわれており、土師器小型丸底壺や高杯が投棄されていた。5世紀中～後半頃であろう。III・IV区の第2面は直径20～60cmを測るPit群が存在する。北側に接する第2次調査の第18地点では同様なPit群を検出したが、縄文土器や古代の土器片がPitから出土しており、今回もこれらの時期に相当させて考えたい。第3面の存在が予想できたが、道路部分においては期間の都合により中止した。

第18地点では第3面に相当する黄灰色粘質土上面からは幅20mの溝を検出した。又、これらの調査区の西側では、第3地点IV区で検出した弥生時代前期の溝の延長部分確認をするため、試掘調査を行っている。この溝は状台地をくくった溝で、第17地点II区の西側に接するところで消失している。本来の地形が著しく削平を受けていることを物語っている。

(19) 第19地点 I ~ III区 (13号道路)

昭和63年度の第2調査地域の南限に接している。東西方向の道路予定地である。第2面のみ調査を実施した。標高は約28mを測り、遺構面は暗い灰黄色粘質土である。東側ではこの上部に暗灰色土の包含層が堆積している。この暗灰色粘質土の上面を第1面とし、南側の灰黄色粘質土を第2面とした。東側では、湧水が著しいため第1面を削除し、第2面まで約20cmを地下げした。遺構には弥生時代前期の溝3、土壙3、河川跡1、古代～中世の溝3、中世の土壙2、近世の溝状遺構1がある。弥生時代前期の溝SD05は、第3地点IV区の溝SD06に繋がる。この東側の延長については第17地点の項で既に述べたとおりである。断面形がY字形の溝と考えられ、第2次調査の第9-III地点北側にその延長部分を確認している。この溝の内側には前期の松菊里型の住居跡5軒が存在しており、この溝が浅い谷地に挟まれた低丘陵を丘尾切断することで、単位集落(5~6軒)を区画する機能をもつものと理解したい。第2調査の第9-III地点は約100m北に位置しているが、ここでは先に述べたように舌状の台地上に住居跡、甕棺墓、貯蔵穴が一体として存在し、台地の両側の谷側には台地を取り巻くと考えられる溝が存在する。第3地点III区で検出した谷の南側の低丘陵を横断するY字溝を検出してお、これらの同時性を考えた場合、こうした溝で囲まれた単位集落が、舌状の丘陵先端に展開している様を想定できる。



第19地点 I ~ III区全景 東から

II区全景西から

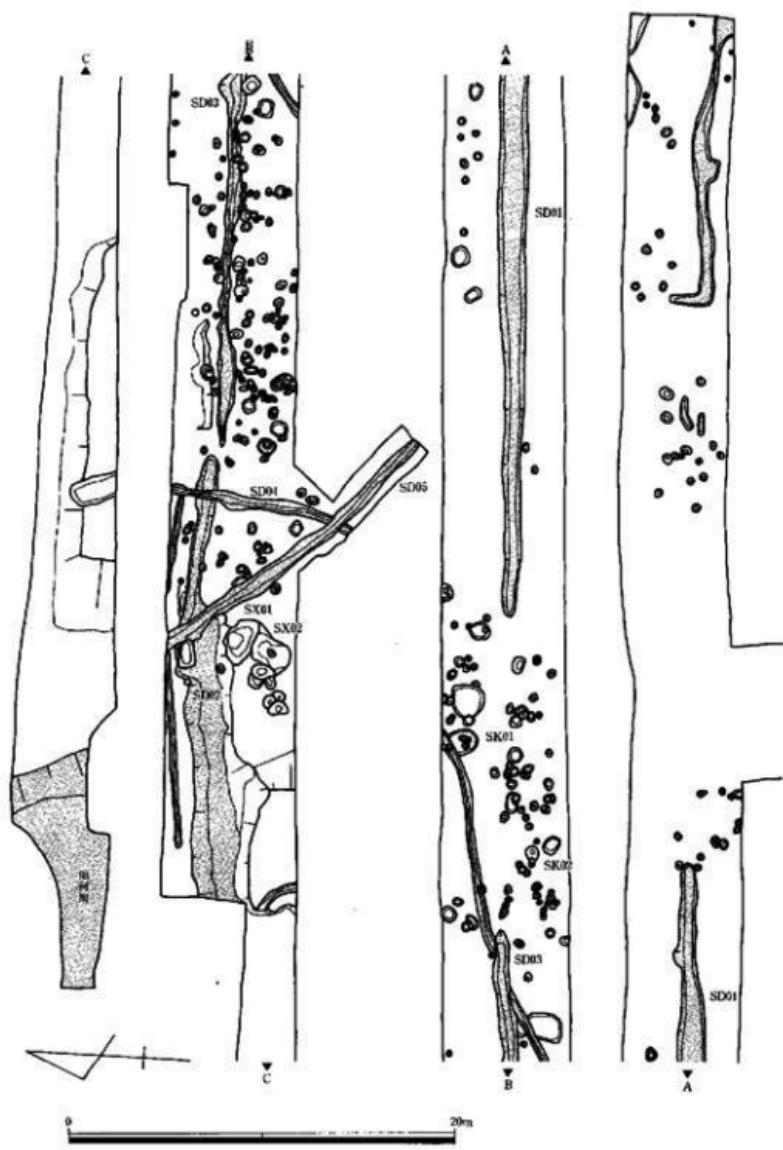
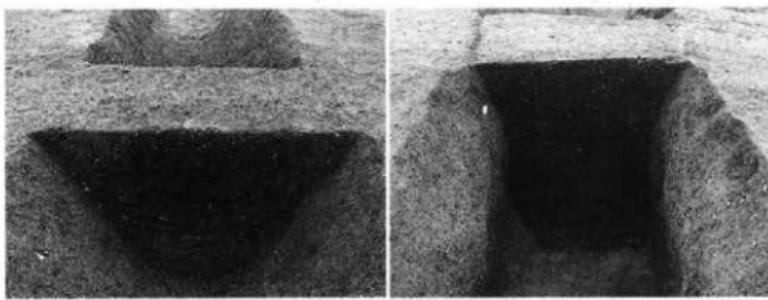


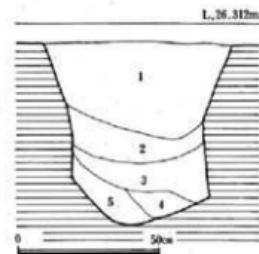
Fig.45 第17地点造構配图 (縮尺1/300)



溝 SD04 土層面

溝 SD05 土層面

中世の土壤SX01・02は溝SD07と繋っており、内部に多量の拳大から人頭大の石が出土した。溜樹的構造とも考えられるが、これもヌルメ構造と考えて良いであろう。遺物は龍泉窯系の青磁、白磁玉緑碗第が出土している。



1. 黒褐色粘質土
2. 灰色粘質土
3. 灰色粘土上細砂を含む
4. " "
5. 黄褐色粘質土

Fig. 46 弥生時代溝SD05土層図 (縮尺1/20)



II・III区全景 東から



第15地点 作業風景

いる
入 部 II

県営圃場整備事業に伴う発掘調査の概要

入部第3次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集

1991年（平成3年）3月15日 発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷アド印刷株式会社

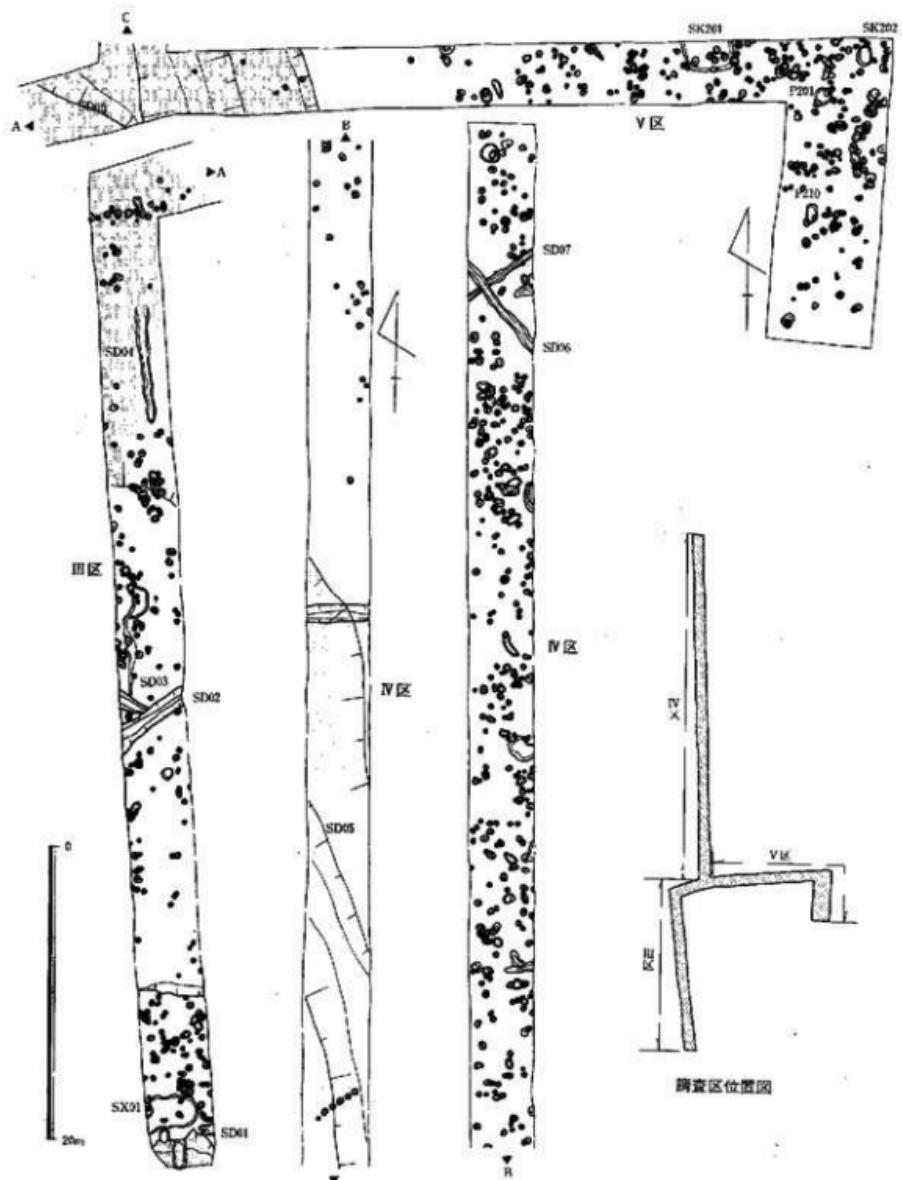


Fig.29 第10地点III～V区造構配進図（縮尺1/400）